

成田名所図會

三

成田叅詣記卷三目次

船橋駅

意富比神社

日蓮上人木剣 同神息剣 同印 古文書 茂呂神社古鏡

淨勝寺 長福寺 下野牧

三山村

三山明神社

年葉七郷考

天和田駅 時平明神社

葦田駅 神明社

井野村

賀清水

白井駅

宗徳寺

所蔵古剣 原胤安墓

圓應寺

古鏡 白井故城圖 白井家系

白井故城址

太田圖書墓 八幡社 白井庄 老楠

淨行寺

原氏所寄日蓮像 經文机識

成田泰詣記卷三

意富比神社 五日市場村と九日市 土人神明と称し社領五十

石 天正十九年 延喜式神名帳小葛飾郡二座 並小意富比神社とハ此神の事云

社 の傳小天照皇太神豊受皇太神宮ハ幡宮春日明神と合殿小祀云

○神鳳抄小 伊勢大神官造督遷宮 二所大神宮御領諸國神戶御厨神田名

田等合下總國相馬郡御厨 内官上分布五十段口入百段雜用布百段外官 夏見御厨

上分三十段口入三十段 一名船橋二百丁 遠山形御厨葛西猿儀御厨 百八十丁新 萱田神保御厨

合五所とあり 所厨ハ沖膳調菜魚鳥野 或云夏見厨ハ今の夏見村の地云

東西と二ッあり古ハ伊勢の神領云々あり所縁云々太神宮と祭り 今社

村北御代川氏住宅地の傍小社あり 神明と号せし社記小其後夏見より今の

地小移せりと見え又所藏文書云々天照太神と祀を終ハ必意富比社とハ たほひの

異云々云々古より意富比神社ハ合セ祀リ此社の社領云々絶 ○一

○成田泰詣記卷三

た社と御厨社事小付神明方の社領の云々ありハ神明と心得云々

或書小伊勢と朝日宮と一在官と夕日宮と稱しと云々又の是ハ見行本 古事記小意

三代實錄及喜式ホに意富比字にイフコと傍訓あり云々附會ヤ云々 富平能地神

○三代實錄小貞觀五年五月廿六日戊子授下總國從五位下意富比

神正五位下 此前小從五位下と授られし 十三年四月三日己卯授下總國正

五位下意富比神正五位上十六年三月十四日癸酉授下總國意富

比神從四位下と見ゆ

○黑河春村云帝王編年記小仁壽元年正月官符曰五畿七道諸國大

小神祇有位更增一階益位新叙六位と見え 文德實 錄畧同 貞觀十六年小從四

位下又大倭社注進狀小新國史曰寬平九年冬十二月壬寅朔甲辰奉

授五畿七道諸神三百四十社各位一階とあり時從四位上と次第に昇

階し給ひなる其後云々天曆六年永保元年 或永治 治承四年元曆

元年建治元年等も天下諸神増位のと見ゆれ今もハ後二位よりハ

○駿河國安倍郡上田村ありわさとしやうく此村に大井神社あり大井川通り此村

と始り志太郡益津郡此村に大井神社と祭るなり駿河新 益津郡郡

社ありひめがはらにや祭神姫大神罔象女命埴安姫命なり風土記

村小大井神社あり祠官大楠 若狹ト云祭神詳ならず社傳小ハ此も罔象女命なりと

外所社社もとハ田中城中小ありて大楠社社志太郡島田驛安倍郡井川村もあり其

三島所云云祭社ありさきと延喜式又風土記小見多神階帳小志太郡大井

神領船橋六郷と称せ地高根村米崎村七熊村下飯山間村金杉村夏

見村都て六村なり後猶後小見ゆ△按小中古願社神領大社十二郷小社六郷と見ゆ

天正所國香取同府おとと由緒あり寺社と神紀の上先領多地頭文書ふより社

○成田參詣記卷三

○二

と心得心を得ハ古ハはるまじく并へざる由緒あり所印と所持するものハ在更心懐念さ

○正月十六日こころ神事二月卯日こころ五穀祭四月十七日こころ初負脊こころの神夏齋藤氏云

つりつり新嘗新嘗九月十九日つり角力角力神事はり是月はりの二十日はり大祭事はりして其

長十三年長十三年御造御造嘗奉行伊奈備前守忠次伊奈備前守忠次此地此地小御殿小御殿と營建營建せり

上総東金地方上総東金地方御放鷹御放鷹時時の事の事なり

以下黒河本村以下黒河本村の畧の畧の鈔別録の鈔別録と摘抄と摘抄を社と

取捨取捨と加えと加えとる所とる所原書原書と少く相違と少く相違なり

日蓮上人奉納木劍

九寸九分



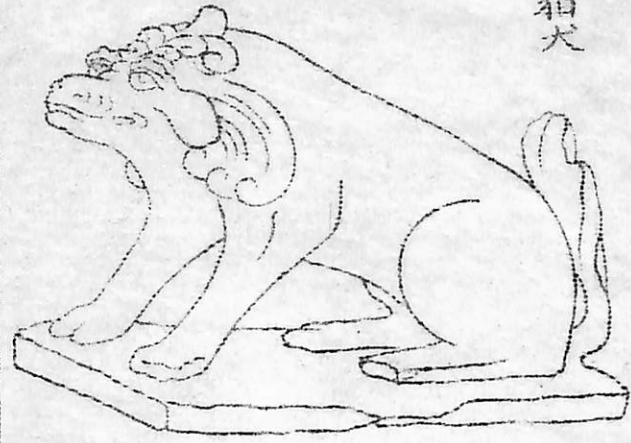
同 神息劍

一尺二寸七分



應永三十年鈔奉劍工傳云神息元明天皇御宇和銅元年作八寸五分刀也
宇佐宮住人之銅才工行平野也他人之
又云うさのまもつゆへいせいへんまうけいしんたをく作之八寸
五分百とよひんりいすまやうとまうけい

同瓦製狛犬



同臺底



菅蓋裡書
此師子象御日
号御判高祖
上人相違無
之者也

中山 日利

○成田參詣記卷三

○三

皇代記下長曆三年己卯五月十九日有初勢奉幣有震業宣倉被奉金
銀師子狛犬 百鍊鈔卷十建又六年五月廿日貴布祿社立國司搦出金
獅子一頭事於殿上被議定云
或云隋書輿服志中二辟邪殿庭置タルコト見之印鈕ニモ用ニル類スヘテカラ
様ヨリノ習ナリ 五寸五分

一下總國船橋御厨六郷

田敷之事

一六郷本八二百町也

一東船橋百六町六田大

一西船橋九十三町三田小

計内弓ヶ之事

一廿七町七田もん 漆郷

一四十二町四田もん 友見郷

一廿三町一田小 今高本

集古種印章部三

日蓮上人印 二



文永十一年三月十日遠藤左衛門尉書拜印



意富比神社モ九別當アリシナルヘン夏
見ノ藥王寺ナトテヤ都テ式社ニ神官寺
ト云寺アリテ必ス藥師ヲ安置セリ猶考
ベン

- 一六郷六十町の時ハ
- 一三十一町 東方
- 一廿九町 西方は内分り事
- 八町三田三十分 漆郷
- 一十三町一及之十四分多之九
- 一七町一及之四十分合當本
- 一十六町 空本郷
- 一十五町 空本郷

應長元年 辛酉十二月廿日

中世

○船橋

色川三中日後昔カ称川村未ハ松戸のありよりありの船橋
りて海小入けんと思つ類聚三代格十六道橋事の條小應造浮橋市

○成田參詣記卷三

施屋并置渡船事 中下總國太日河四艘

元二艘今如二艘

とあり太日も六日

轉訛ならむとて此大目と右日に作りあり太井小龍

の流ハ船橋登時と思へ利根川未船橋地ハ藤ノと云ハるけうたと思ふ船橋ハ今當中
小橋とも土橋とも此ノ元船橋とありかん太日河ハ原ノ大橋と云ハる船橋と云ハ
渡りノ見ノ三代格小渡船四艘ありて知らるあり此ハ
後太井と呼改りハ島田宿大橋川同名と云ハる

式帳 類從本 小度會山田原造御厨 改神序 云名 号御厨即号太神官

司 支云 又等由氣官儀式帳 類從本 小厨屋壹間 長三丈廣一丈 云 吾妻鏡

卷六十七 文治二年三月十二日關東御知行國ノ内乃貢未濟庄々召下

家司等注文被下之可加催促給之由云今日到來 注進 三箇國庄

庄事 下總 信濃 越後 合 下總國 船橋御厨 院御領 相馬御厨 同前

黑河春村云院御領とありハ寫誤ニテ大神官御領ナリ院御領少ナリトあり
次文小信濃國麻績御厨ハ太神官御領ニテ同國布施富郡保科ハ院御領ハ尾佐
又橋原御厨ハ九條城興寺領とありモ倉科庄ナリ錯乱ナリ事疑
カ 院御領ハ基庄とありテ云ハるハナリテ本堂と檢して云ハる

船橋六郷ハ高根村 末崎村 七熊村 下飯山間村 金曾本村 夏見村 等

りし之れと文書小據て考ふに 東ハ宮本高根米ヶ崎西湊夏見金曾 此六郷

なるを ○六郷本二百町也神鳳抄 右小船橋二百丁とあるを 見此の義久

此頃より然りしを 其後六十町一減少せしむるを ○百六町六田大

九十三町三田小大とハ二百四十歩をりし小とハ百二十歩をりし合せて三

百六十歩と一段と 百六町六段二百四十歩に九十三丁二段百二十歩と 合せて六田三田

おれ田ハ段の借字とて次此文小及と 天正十七年高城胤則の文

書小端と うけり但し田字と書る例ハ此餘いまた見ねらるす 此と田

の字もタシとも 傍へ一吾妻鏡卷九左 小仁田四郎忠常とあり ○

廿七町七田と云く以下三條合て西船橋九十三町三田小なり ○湊郷船

橋此舊名 なるを と いへり さも あつ と さ 此と その うみ船橋ハ庄号

の如く六郷小係社ノ号に て 地理いと 廣 くり 一 所と みの 此ハ そ 此と 東西

ふたつ よ 分て東船橋三郷西船橋三郷とせしもの 如 づ 一 湊夏見

○成田泰譜記卷三

○五

金曾木の三郷ハ西小属ハ宮本高根米ヶ崎ハ東船橋小属ハ

る なる づ 一 上小載たる社家此説とも あ せ ん て考ふ 一 さ て 今思

ひた と 時ハ湊郷ハ今此海神村あたり と 宮本 と 今 の 船

橋 なる づ 一 さ と せ ら 但し社傳ハ宮本ハ夏見村あり と 之れと夏

郷船橋北小あり と 東西二村あり神鳳抄ハ夏見御厨一名船橋 と あり

る なる づ 一 此夏見 と 船橋此旧名 と 一 け 此 ○金曾木郷

夏見村北小今金杉村あり 是 なり ○八町三田三十分十三町一及とん

十四分七町一及とん四十八分 と 社を合 と せ に 廿八町六及九十二分 と あり

西方廿九町と あり 合 と せ と 不審 と 然 ○十六町十五町 と 此ハ東方三

十一町 と あり と 協 へ り ○米ヶ崎今此米の崎村 と あり と 云

○太政官符 類聚三代格卷十六

應造浮橋布施屋并置渡船事

一浮橋二處

駿河國富士河 相模國鮎河

右二河流水甚速渡船多艱往還人馬損沒不少仍造件橋

一加增渡船十六艘

尾張美濃兩國堺墨俣河四艘元二艘今加二艘尾張國草津渡三艘元一艘今加二艘

駿河國飽海矢作兩河各四艘元各二艘今加各二艘遠江駿河兩國堺

大井河四艘元二艘今加二艘駿河國阿倍河三艘元一艘今加二艘下總國太田

河四艘元二艘今加二艘武藏國右瀨河三艘元一艘今加二艘武藏下總兩國等

堺住田河四艘元二艘今加二艘

右河等崖岸廣遠不得造橋仍增件船

一布施屋二處

右造立美濃尾張兩國堺墨俣河左右邊

○成田泰諸記卷三

○六

以前被殺二位行木納言兼皇太子傳藤原朝臣三守宣稱奉勅

如聞件等河東海東山兩道之要路也或渡船少數或槁梁不備因

茲貢調擔夫等來集河邊累日經旬不得渡達彼此相爭常事關亂

身命破害官物流失宜下知諸國預太安寺僧傳燈住位僧志一依

件令修造講讀師國司相共檢校但渡船者以正稅買備之浮橋并

布施屋料以救急稻宛之一作之後講讀師國司以同色稻相續修

理不得令損失

承和二年六月廿九日

一尺寸

鮎河、愛甲上向、即、馬八川ナリ、今、三、縣、ノ、獻、上、マ、リ、古、ハ、
鮎河、云、シ、名、殘、リ、ナル、ベ、シ、右、瀨、ノ、右、古、ノ、誤、リ、ナ、リ、
矢口、邊、古、川、村、下、リ、此、ヨ、リ、取、ル、ル、ナル、ヘ、シ、古、瀨、河、即、チ、
今、ノ、六、郷、川、ナ、リ、

天照大神寄進狀

右下總國葛飾郡六郷之四至

▲夏見ニ山王ノ社アリ此社ニ向ヒ左ノ方ニ神
明アリ是元地ナルヘシ社傳ノ宮本ト云
地ト云義ナルヘシ古文書ノ宮本ハ舟橋ナリ

東限覆宮塚 南限海

西限洗河并 沓懸北限石拔路

平滿胤私領國也 依由緒有太神宮奉

渡任恒例天下 恭平國土豊饒

可有御祈念仍子々孫々不可相違寄

進狀の件

元年卯月十六日

平滿胤 園

ヘシサテ宮奉ト云村名ハ意富神社
ヨリトレナルベシ西海神村ニ湊トテ字
アリ往昔鎌倉時代ノ船津ナリト云
湊ト云シモ是ニトレナルベシ今名ノ海神
ハ鎮守海神ヨリトレナルベシ或云此村海
夫テ海人ト云レテ人ト神ト同額ナルハ
海神トモカキヤト云
七無ハ末ヶ崎ノ分リシナルベシ熊トモ大
一ツモノナリ波佐間モ米ヶ崎ノ分リシ
石拔路ハ金杉ト夏見トノ北ニアルト云
セリ江戸名所函會ニアカサクミヤト見
據リ所アルコトニヤ

黒河春村云 饒ハ此頃ノ作り字々々一社祀小饗亡悲切同麩此曰志加

○覆宮塚 山崎知雄曰覆宮ハ意富比宮此借字々々一ト云リ 場の内宮

の地と移る所小塚あり相富富氏歴代其墓所 〇洗河 山野村と西海神村と云

〇成田参詣記卷三

〇七

間小街道と横きりて流る中三天ハりの小川あり是と洗河とも亀井

の太刀洗河とも稱ふといふなり 〇沓懸 祠官某云山野のむら 沓懸の地名ありト

〇平滿胤 按まろ小滿胤ハ千葉の正統よて千葉介孝胤十代其孫ト云

名永三十三三年六月八日卒 年六十四 常安寺と号し貞胤の孫氏流の男なりト云

系圖みねむむきなり 〇私領國云 船橋六郷ハ滿胤の曾祖父胤宗 正和

三月廿八日卒 其代までハ御厨ありト祖父貞胤 親應二年 二月廿日卒 父氏胤 貞治四年九月

の時小押領したりけむと此應永六年に在りてもとの如く返すも後

たり依由緒有太神宮奉渡ト云も右の故あり 〇元治四月

十六日 平治元と云うに書る三字ハ後人の入墨ナリト云 室暦五年 本社ノ紀録に

ハ承久元との件といふは時代と古くせんたのふけりト云ふももの

よて實ハ應永六年なり是ハ滿胤ハ時代よて掲馬ト云ふと云ふなり 〇

貞此花押ハ華押潜卷三ト云ふも見えて又平西如斯と並ハ載たりト云

所藏文書目錄

應永廿年六月廿九日神田寄附狀斷簡
 文龜四年二月廿七日舟橋云
 永祿三年庚申六月十六日西舟橋九日市場云
 子正月十六日 永祿七年 右於社中云
 永祿九年三月日右於下總國船橋郷内云
 元龜二年辛未十一月廿六日右舟橋云
 壬申閏正月十六日 右於舟橋云
 元龜三年 右於舟橋六郷之内云
 天正四年癸酉九月廿日舟橋六郷之内云
 戊子九月十九日 天正六年 喧嘩口論之事云
 天正六年 戊寅九月十九日自當年於船橋之郷云
 八月十四日 如去年之神明之御町云
 天正七年八月廿日
 正月晦日 如來札改年之云
 天正十二年甲申二月十七日德政之事御位言候云
 天正十七年 己丑極月十七日八王子免田四端云
 天正十八年 卯月七日於下總國船橋之郷云
 元和九年霜月吉日 抑奉抽丹誠意趣者云
 霜月六日 昨晚者 緩云
 正保三年 成夷則念七日 今度者何分云
 五月朔日 端午之御祝儀云
 三月四日 為桃節之祝儀云
 ○茂侶神社 八葛飾郡 三輪山村 小あり 三輪山明神 小あり 此社社領二

○成田泰詣記卷三

○八

氏繼 原氏
 胤縁 原氏
 萬葉 虎朱印了北條
 豐前守 原胤吉
 胤辰 高城下野守
 正木 大膳亮時茂
 胤辰
 胤辰
 胤辰
 阿弥道感 北条上總介綱成
 胤則 源次郎
 胤則 龍朱印了里見義康
 田中吉官 主殿頭九初定官後
 鍋島勝茂 信濃守
 平後貞胤 千葉氏
 秀就 松平長門守
 光圀

船橋驛 乃圖

海上眺望

はくしぬ

足柄小寺

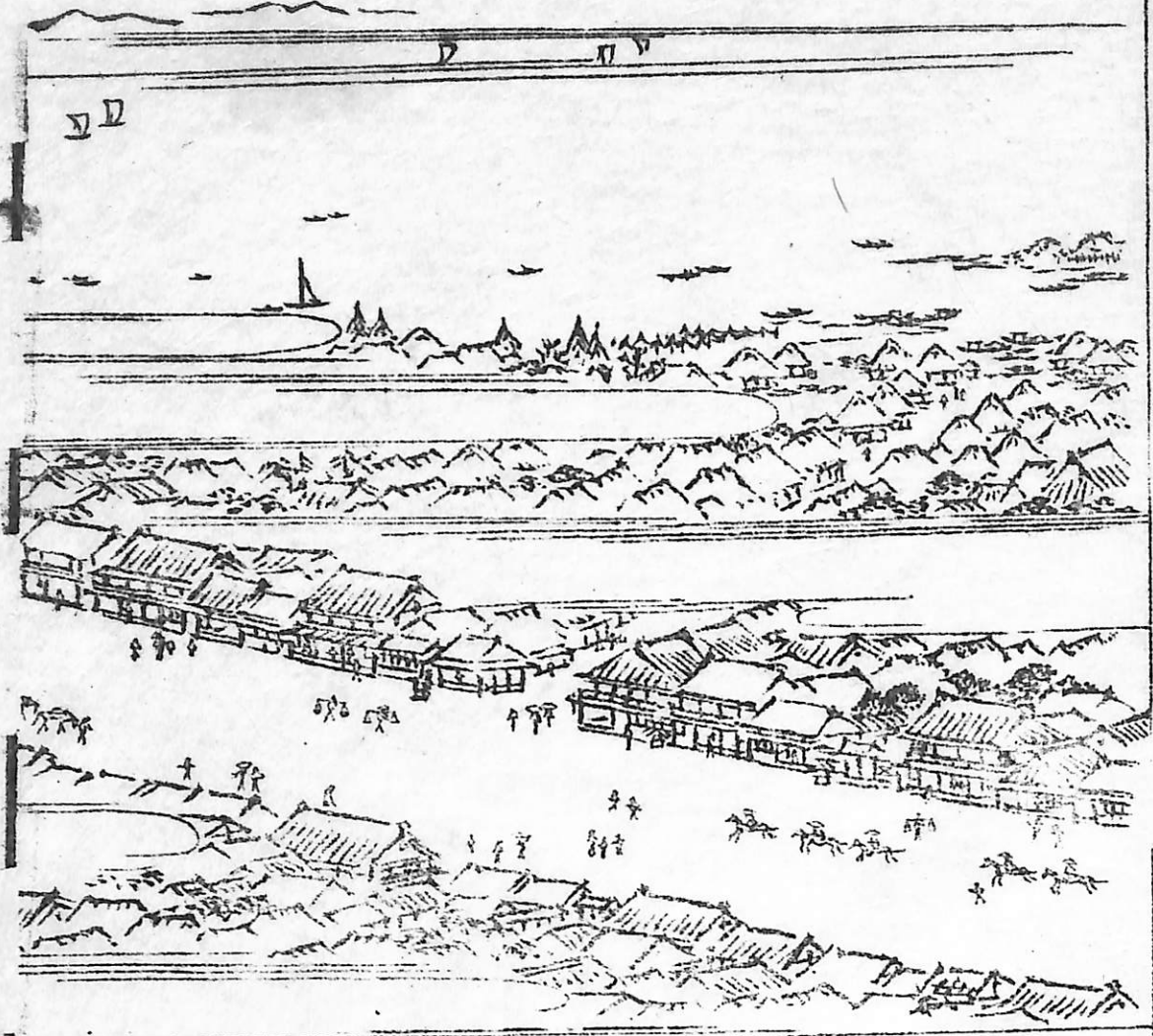
つらね

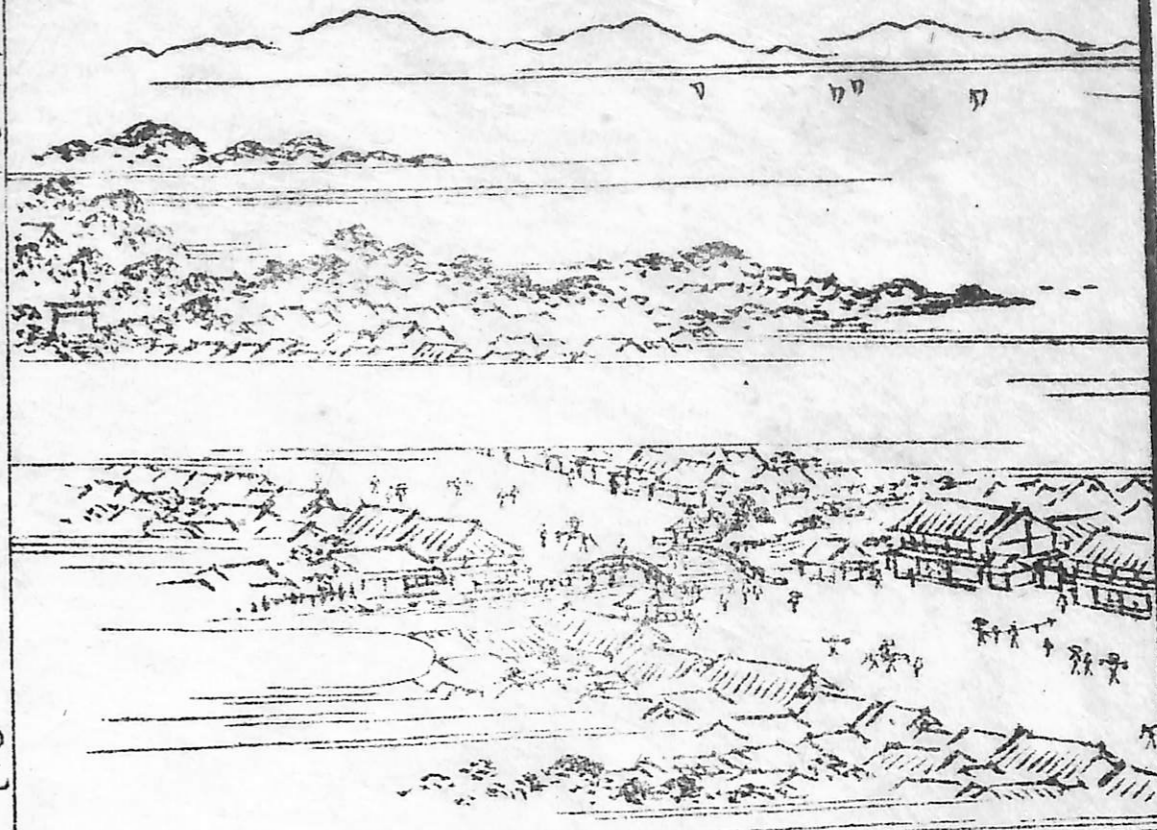
不徳

船乃

大江戸

濱臣





○成田奈諸記卷三

○九



十五石ありて別當と神宮寺と云えは初官社人そありてと云あり
 古事記傳十二二十下小沛諸山ハ即三輪山のとあり沛諸ハ沛室小て凡天神
 社と云下卷朝倉宮天皇大御哥に美母呂能伊都加斯賀母登云云
 万葉三四十下小吾屋戸尔沛諸乎立而て三輪山と沛諸山と云るハ此と婚小
 て中巻水垣宮段書紀同御代卷ふとに見え万葉二二十下小三諸之神須
 疑七十六下味酒三室山をくく免ふ此山あり沛諸と右小云る如く何處小ま
 社神社のとなりに此山も其名を負る取分て此大神と号崇免る
 今京にて祭りと云ハ賀茂祭山
 白橋原宮段小美和之
 大物主神と婚て見えたり
 神名帳大和國城上郡大神大物主神社 次相嘗新
 嘗以上要
 此説小より推考るに茂侶ハ沛諸ヲ發語ニ社省よく此三輪明神
 の事なりて凡て古来の大社ハ神宮寺と云寺有りて別當と勤の敷地
 本立を何と稱く典型の存もそのを社ハ必此社なりてその詳ありと

八下總式内神社考小見ゆ

○朝野群載三卷遊女記 大藏卿匡房卿 自山城國与渡津浮巨川
西行一日謂之河陽往返於山陽南海西海三道之者莫不遵此路
江南北北邑之處、分流向河内國謂之江口盖典藥寮味原厨掃
部寮大庭庄也到攝津國有神崎蟹島等地比門連戶人家無絕倡
女成群掉扁舟著旅舶以薦枕席聲過漢雲韻飄水風經廻之人莫
不忘家洲蘆浪花釣翁商客舳艫相連殆如無水盖天下第一之樂
地也江口則觀音為祖中君□□小馬白女主殿蟹島則宮城為宗
如意香爐孔雀三枚神崎則河孤姬為長者孤蘇宮子乃令小兒之
属皆是俱尸羅之再誕衣通姬之後身也上自卿相下及黎庶莫不
接林第施慈愛又為妻妾歿身被寵雖賢人君子不免此行南則往
吉西則廣田以之為祈徵嬖之處殊事百丈夫道祖神之一名也人

○成田奈請記卷三

○十



昔の遊女名を
觀音と云ふ
朝野群載小見ゆ

六八莊嚴のうらむ
 三三とれあや近
 三三乃何大夫と
 云ハ謡曲の師あり
 轉りてしてこハ
 青曲妙なるを
 秘してらん此
 里の其ハ兵衛と云
 緯子ハ何あより
 たりあや奇しき
 ありたりあるなり
 へ

七十二番職人歌合

三十番

ありふや名はますのいたつら
 ねありすよまもあまけり

金閣竹枝詞

千金不惜買多情只為娥眉一笑傾
 但使愛才如愛色文人何有不平鳴

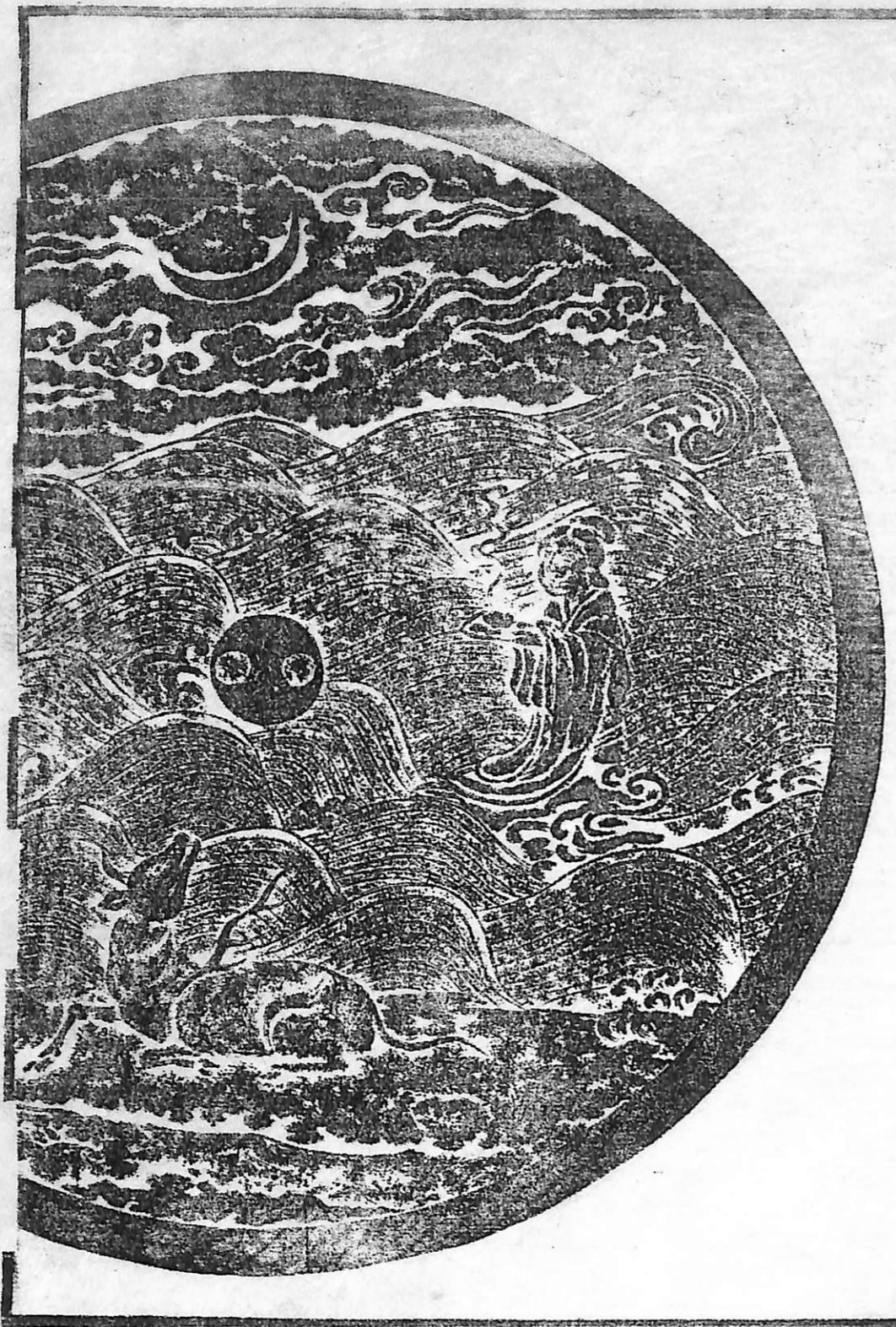
菴鷗漫叟

○成田恭詣記卷三

○十一



別剋之數及百千態蕩人心亦古風而已長保年中東三條院參詣
 住吉社天王寺此時禪定大相國被寵小觀音長元中上東門院又
 有御行此時宇治大相國被賞中君延久年中後三條院同幸此寺
 社狛犬犢等之類並舟而來人謂神仙近代之勝夏也相傳曰雲客
 風人為賞遊女自京洛向河陽之時愛江口人刺史以下自西國入
 江之輩愛神崎神崎人皆以始見為夏之故也所得之物謂之團子
 及均分之時廉耻之心者忿厲之興大小諍論不異鬪亂或切鹿絹
 尺寸或分米斗升蓋亦有陳平分肉之法其豪家之侍女宿女下船
 之者謂之湍繕亦稱出遊得少分之贈為一日之資愛有髻倭組絹
 之名舳取登指皆土九公之物習俗之法也雖見江翰林序今亦記
 其餘而已或云百太夫云ハ男根ノ負ヲ多ク持タルカアルトナレシ但シ百太夫ノミテハ通シガアルニハ道祖神ニト
 云コトヲ注セシテ又云傍書一條トマルヨリ上ハ江翰林序十ノ下ハ即チ匡房卿ノ記ニ入リ云ヘリ
 西光山淨勝寺 船橋漁師町小あり寺領十石 天正十九年 淨土宗増上寺也
辛卯十月



本尊阿彌陀如来寺紋小南桐三鱗を用ひ 閩山金蓮社頼夔周公上

人永正三年廿五日 中興專夔大朝上人寛永元年三月廿五日

夏見山長福寺 東夏見村あり 觀音堂領五石天正十九年 幸卯十二月 禅宗曹洞派

原本郷寶成寺末たり 閩山得蓮上人田融天皇御世 天台宗なり 中興八夏見加賀守政芳

念佛躍念と云法舎何道侶群集セリ 此寺每年二月十六日天堂

鐘識前下總國葛飾郡千葉庄夏見郷夏見山長福禪寺者方田融

帝統御之時上人得蓮救世大師靈感為嚴慈草創之遠挑四明法

燈實為東關台宗之巨磅也嗣後時代寢變數有興廢永祿中夏見

加州刺史政芳法諱瑞興院殿長福通榮大居士慨嘆靈場之將湮

没及就舊址締草殿宇且割膏腴之地附之招空山和尚董席草教

唱禪相繼順清通法兩首座住焉法首坐與大檀越相議特請能山

○成田恭請記卷三

○士



武陵縮寫

社藏古銅鏡 徑九寸

或云此鏡ハ持統天皇ノ時代ノモノト云據アルコトニヤ。社傳二千葉家ヨリ源右大將家蒲殿へ贈ル書ト共ニ當社ニ納ムト云

○成田叅詣記卷三

○三

藝禪師為之開祖藉是為寶成支流云々 下文化紀元甲子十月吉

日幻住豪徳寮室堅光識

下野牧 二總馬牧の權輿ハ天正度 御閑府より此ことなる之を社と明割

と頒を社一の慶長十九年以來なり 享保中野付組合村ニ定り 寛政四年改正あり 上野中野下野

と小金と稱一内野高野柳澤小間子取香矢作油田と佐倉と稱ふ別小

印西牧あり都て十一牧あり牧子と稱する士凡四十餘名各地小散在に

その長と綿貫といひ小金驛小住セリ 先祖ハ千葉氏の 庶族なりと云 毎年春秋二度に

官命ありて二歳以上の駒と捕まむ 小舎ハ佐倉ハ秋ニ ○清水溪臣ノ流考紀 行兼川氏泰嶺館文集等に其之と云

○主税式上凡諸國牧馬不堪貢進者申官賣却混雜皮直毎年出舉

用其息利以充貢馬經國之間及牧馬秣料云云

兵部式諸國馬牛牧下總國 高津馬牧 大結馬牧 本島馬牧 長洲馬牧 浮島牛牧

續紀文武天皇四年三月令諸國定牧地放牛馬 大寶四年三月
給鐵印于攝津伊勢等二十三國使印牧駒犢

厩牧令凡牧每牧置長一人帳一人每群牧子二人其牧馬牛皆以
百為群凡牧牝馬四歲遊牝五歲責課牝牛三歲遊牝四歲責課各
一百每年課駒犢各六十其馬三歲遊牝而生駒者仍別簿申凡牧
馬牛每乘駒二疋犢三頭各賞牧子稻廿束其牧長帳各通計所管
群賞之凡牧馬牛死耗者每年率百頭論除十其疫死者與牧側私
畜相准死數同者聽以疫除凡在牧失官馬牛者並給百日訪覓限
滿不獲各准失處當時估價十分論七分徵牧子三分徵長帳如有
闕及身死唯徵見在人分其在厩失者主帥准牧長飼丁准牧子失
而後得追直還之其非理死損准本畜徵填凡在牧駒犢至二歲者
每年九月國司共牧長對以官字印印左髀上犢印右髀上並印訖

○成田泰諸記卷三

○十四

具錄毛色齒歲為簿兩通一通留國為案一通附朝集使申大政官
凡牧地恒以正月以後從一面以次漸燒至草生使遍其鄉土異宜
及不須燒處不用此令凡須按印牧馬者先盡牧子不足國司量須
多少取隨近者充凡牧馬應堪乘用者皆付軍團於當團兵士內簡
家富堪養者充免其上番及雜駟使

○總常日記

此野ハ 銚 上總下總ふよりて横四十里ふたふとそ

其野ふたふとふたふとふたふとふたふとふたふとふたふとふたふとふたふと

正使一人 副使二人 綾蘭笠をいりて袴さうそくして馬ふりた

圍小のりり種をそまふはまて野駒とまふりいりていくたひりかく
追入て牧使ハ土色のみ人なる假屋小居て弱毛つけあやめん

筆とりて一ツ帯とりて五六疋は中のかこひ一入て列率と
もつをせめくらしなして駒と中ふとりこめ用ふあたふさくすも物使
る社とさしとふを待てりりこ社中に書きたらたすもの一二入
弱めくふさくへよまを竹杖少つけもちてたひまはし打りて社を
くはたさるたひさつまておしたふまある一人やの口強をまを
引たら四五人そつて引ててさひより十町はりの西ふりり地の厥
先く歩路ふはれくありいとあさき駒はこひり社地をまらたて
藪小樺入もさそ有とりのあみの中にあるほもさひつなつら
しとて土道浅くさそへ出んとさそを土道の上たがりことさ多く
む社あてさそもて進たろすこととて五六疋中もさり砂さ
社たふふも用よあたふつよの年さうく又い来んとくは用ふあ
たふさなもは情たしてさそのをさ不用の駒さもにつささるこひ

○成田恭詣記卷三

○十五

とたたらやさなり焼印ハ國形所くふよりて印社うたらうは社り五
六疋はくちんはること敷度少てさはてた其目さほめ退入さる
駒社敷六百餘にて用ふあたり引たて行くハ百七十ありな依
べりりく此大野十所うほくをめぐりてさることな社を敷社あま
たふさこと思ひやりぬりいとささうくめはらうささみものさく

○秦嶺館文集菱川大觀始觀執駒記 余初来江都則聞南北總多曠野
而牧馬蕃庶夏月執駒奇觀也心竊馳焉旋及視佐倉學政増得詳
其說曰城東十里有酒井驛遵路北轉東折而行數里設十字門
謂之木戸踰則為内野一望可方十里又東為高野方二十里又南
且西為柳澤方三十里並處々突出若懸疣然謂之入野并是而計
則不知其幾許里以上本藩所管置典牧二員牧師數十人隸焉曰
小間子曰取香曰矢作曰油田地形皆縱長並牧長綿貫司之總稱

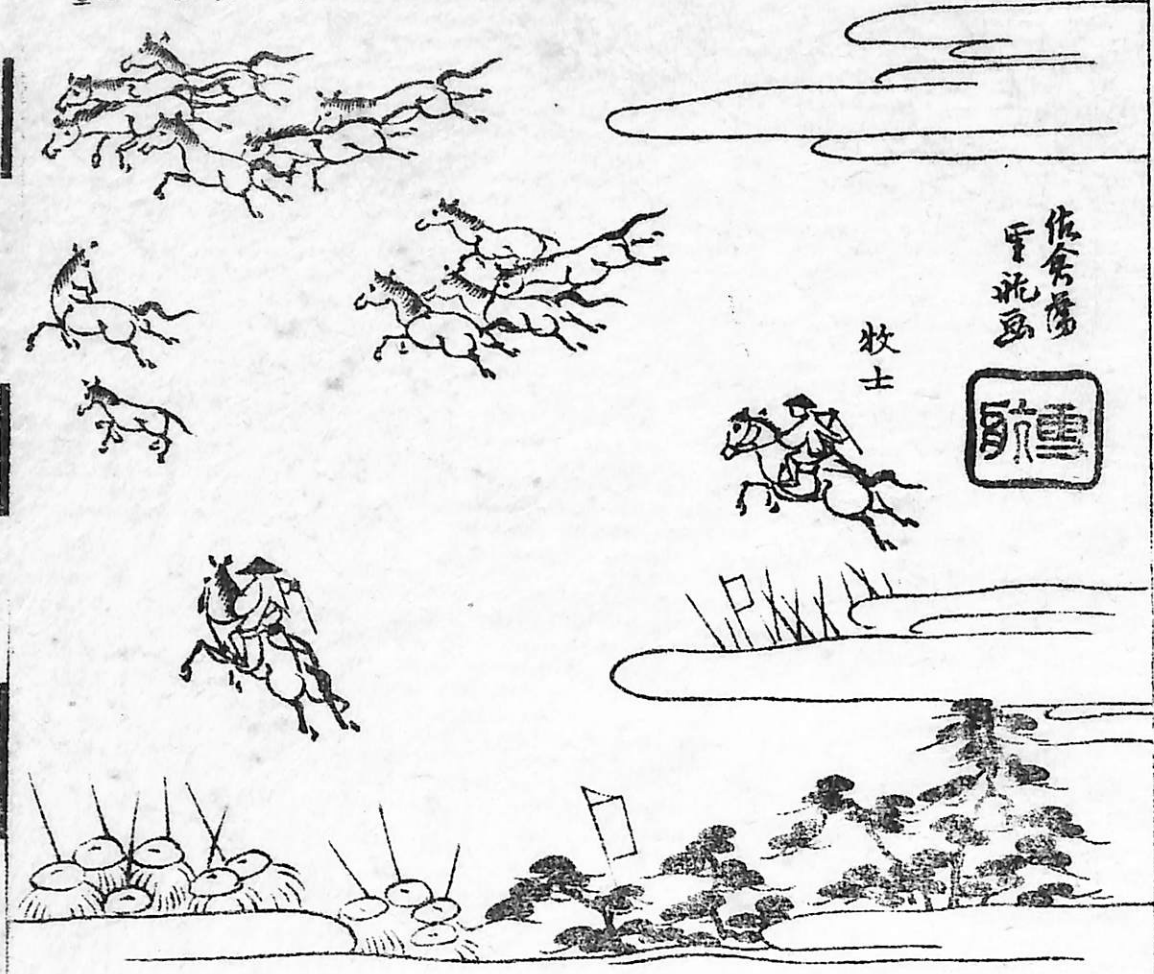
乏曰七牧就中油田獨阻餘皆接壤東遷東金臺西瀾大和田殆乎
 二百里云牧之四邊率多雜樹松林坳中延袤數里築壘周之處
 中斷謂之鳥贊、虛也其內又匝壘減半半減之內又半之謂之
 溜袋又極小之謂之穀茂、者籠也形如四字折右角中斷下盡
 內副二一左則連下而缺上右則屬上而缺下是為左右籠各可
 容千匹正面土階數級踐以升壘、上作假亭板隔之為三階前方
 數十步是捕場也每歲六七月之間課役于數郡蓋調列卒也先期
 二日冷傍近村民驅野馬之匿山林者謂之山拂翌日列卒數千裹
 糧宿圍四邊逐出于坳中謂之內拂及期典牧駕長黎明輕裝與牧
 師數十騎舉鞭縱橫馳騁驅各處成群者哀乎一處既而或左或右
 距數十步並之而馳又自後逐之左右並馳者蓋防其旁逸也倏忽
 之際自外壘驅入內壘分卒扞衛斷處相繼皆如前次第驅之先聚

○成田奈諸記卷三

○十六

下野牧野馬執の圖

佐倉風土記云野駒在狹南者自千
 葉以東至根古名北者酒、井以
 東至寺堂曠原縱衡各三四十里風
 牧于所、官籍其北壯消息之數皆
 有屬禁歲之六月吏未執之其執之
 處謂之込込凡七處曰内野曰高野
 曰柳澤曰取香曰小間古曰矢作曰
 油田是也每込三四十步四圍築防
 傍開三門及時刻卒呼聲牧士數騎
 馳逐之或百或數十以聚一所而納
 諸込乃官吏監臨余牧士簡擇毛物
 不可者驅出之可者留之一人竿頭
 繫繩纏駒首又一人躍上駒脊急抱
 其頸仆之執之尽其込而止矣



其二



救士

馬ノ分免ヤ一群皆ナ
 其馬ヲ圍繞シ居ル下
 一日母子行步ニ及ニテ
 去ト云

○成田奈詣記卷三



手ニ持シ竹ハ
 三尺許ナリ
 小幟ヘ村ミ
 名ヲ記ス

勢子
人足

○十七

穿處へ
追ひ入る
の図



雪

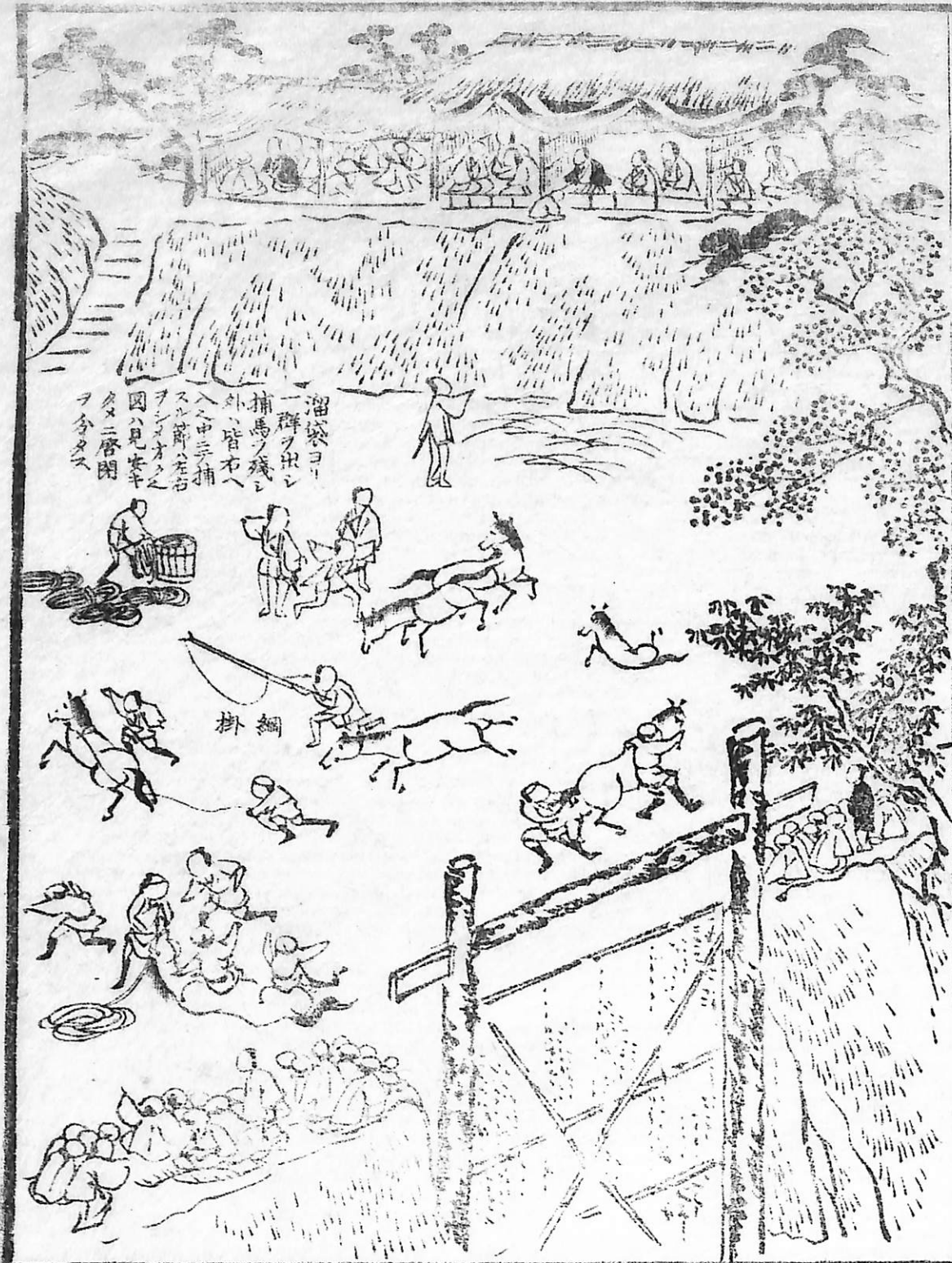
○成田泰諸記卷三

○十八

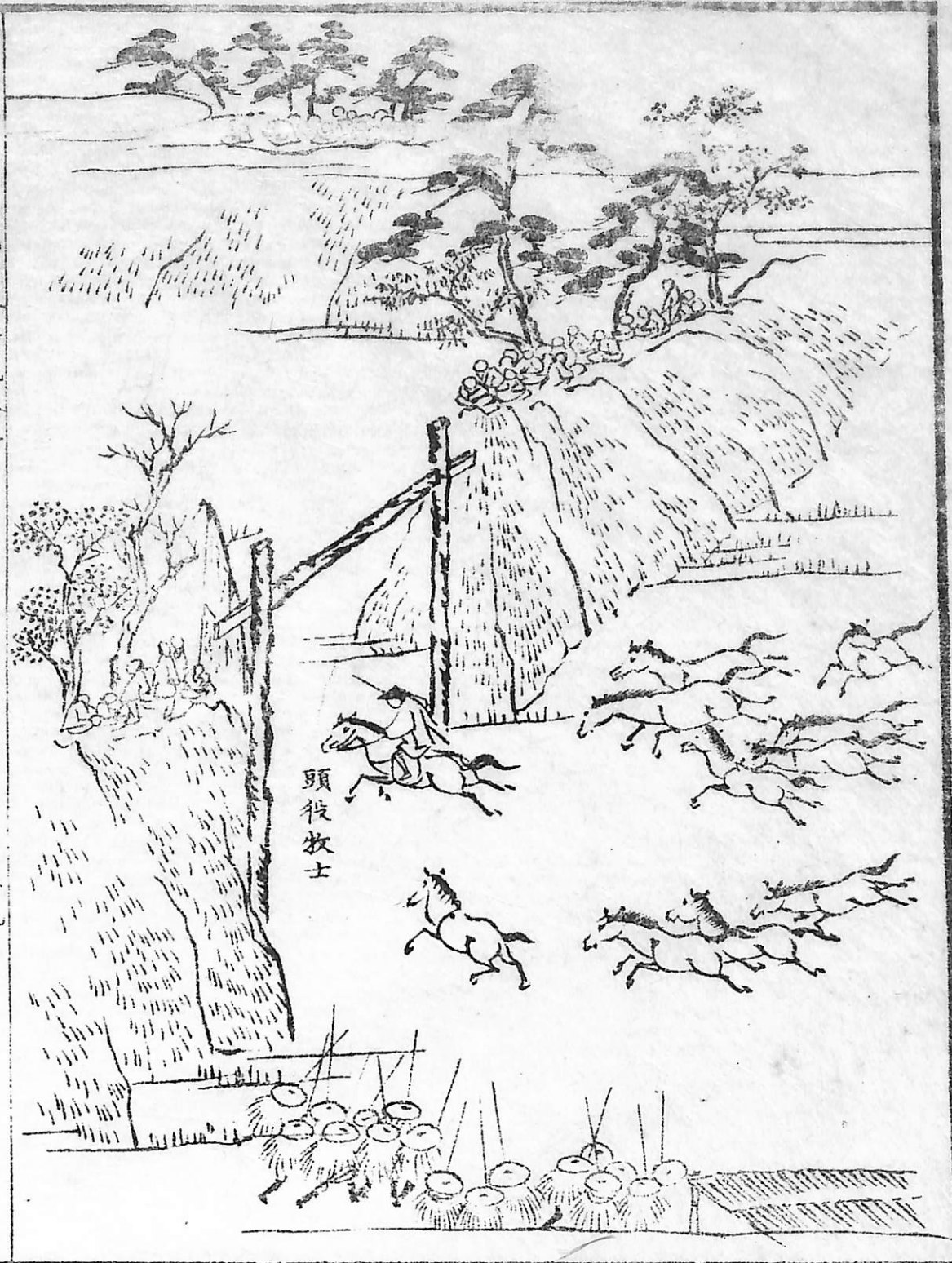
其三

込へ追こ
むの図





○成田参詣記卷三



○十九



慈常日記
牧場

と軒春

野のひの

めこま

あひさ

溪臣

其四

○成田参詣記卷三

二十



野馬と
引立るの図

一匹ヲ牽ク
人数凡十
人許

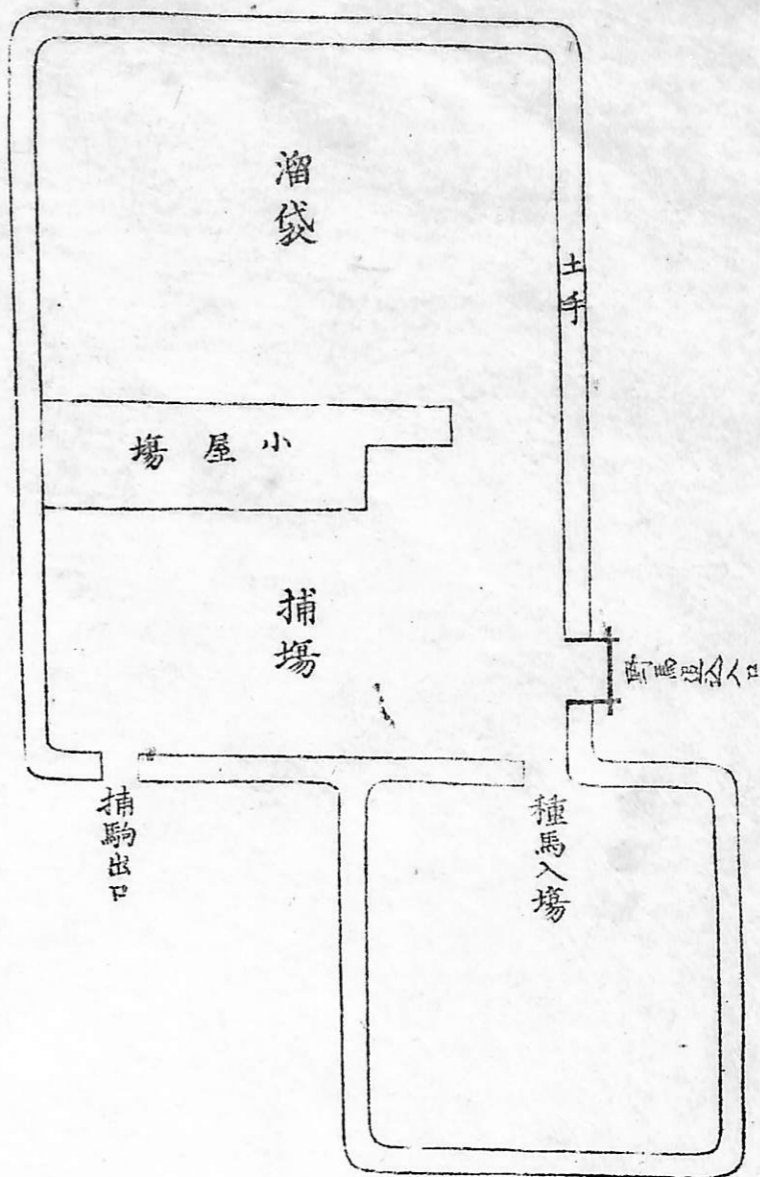
其五

成田

下野牧込之圖

烙印牡ハ左北右種馬ハニヲ烙ス其印ハ牧コトニ異ナリ

近来進献ノ馬此地方ヨリ出ト云



成田系諸記卷三

〇二十一

于左籠又驅趣右籠此間典牧既下馬立階左 官使至則整折迎之 官使一揖歷階先升坐亭右間典牧繼升易服坐中間駕長及鑿師坐左間書手二人侍亭前左右牧師數十人或持竿頭繫索者或剪小竹杖之散立場中分卒塞場口又擇民間有膂力者數人以充捕夫謂之駒倒於是牧師兩三人橫杖入右籠驅五六馬出或北或牡奔走場中持竿者圍視認毛物乘勢飛索絆頭釋竿數卒拾索控之而不克捉一夫躍抱頭一夫僂倚之或攪尾振或衝脇劫數夫戮力相挑與馬倒牧師從而羈之俾役丁四人牽送之酒々并强悍者在路猶騰驤不止大困牽丁其力可想已驛中有牧師班頭後園築小壘納馬捕場事畢典牧与牧長對選駿送上官廐每牧二匹次者賜之藩每牧九匹餘咸賣之於民年有增減又或有倒而不羈之點印而放者凡孳生駒駒例取二歲以上校印之 官廐下吏二人

代燒鐵印握長柄以點髀上每牧異章其他咸開塲口放出任其所之壯謂之駒牝謂之馱者獨充任載之用之義蓋方言也初方馬之出籠牧師一人向亭上高聲呼其色歲駒馱左右書手秉簿記之然後應執者執之應印者印之應放者放之觀者其初踞內壘上以望從外入後則先至籠傍左右攀躋壘上或俯籠或臨塲其樂不可言也余晤斯言形竦席間神飛郊外者久之爾後每歲祇役佐倉率留五閱月以乙卯之秋與齋藤翁暨二三子約將往內野有故弗果越數日遂奔柙澤四更起蓐食而發各提燈照途從者一人擔絡尾之出城南經鎬木村而曲折度田徑生路不辨方位真行可二十里而東方稍白又趨數里而入野則宿霧四掩草露沮洳排草躡露步又數里而得一壘踰中斷處而左右望匹馬無所見二三子以謂群既入內壘也促步而進俄頃日出霧露餘青松如膏沐者方覩真景

爽快吐氣不覺又過一壘則數卒衛斷翁曰得矣群萃乎此際宜急倚前壘以逸待勞皆可其策快走進而登壘拭目延望四邊連天杳不知津涯垆中軟草氍布潔泉玉涌林樹蒨葱點乎廣野重壘繚繞似常山蛇勢使人有汧隴間想乃眷南方之原若雲之屯若錦之陣與初晰相映晶晶炳炳蔚燦燦余顧翁曰美哉溶溶焉非是河精之颺采則或乾象之騰文也翁未及荅忽然呼色仄聞塵飛煙起衆皆裂眦則數十騎揮鞭矢驚電驅群馬喧嚷鴻驚兔走一瞬猶遲萬蹄重沓既超中斷凜凜焉若江河之決堤不遑指毛物辨種類既而群鬣又叢于北壘之下於是小甲指揮遠圍左右與後部分同心列卒蟻旋邑別殊號徽幟星羅騎者亦姑離鞍藉卉箕踞蓋又休馬足也此間再進而得先憑籠壘則日將暝壘上觀者嗔咽笠摩鞋累少焉復迥傳哄邑地響草靡一騎鷗翔掠塲口而入左籠謂之端馬

群馬從之須更充盈籠中寸土靡餘則徒鼓鬣掉尾或張斷高嘶耳
 弗能翹足跳梁也余与二三子欲品評種類翁曰吁差毛斤形猶且
 不易矧於別種料才乎姑就陳篇而論之狼尾魚目則毛色也文臂
 花肩則形相也妍蹄繁鬣則種類也相混難辨若陰唇白顛之屬形
 或疑于毛色小領遠志之係種太惑乎才性且夫在相之頌其可指
 而命者不過驪黃騄駼數品耳今籠中之殊相異態安能究詰也余
 欲置對不得徒撫空懷而嗟爾於是典收歛容欽行 官使至場外
 降轎子徒步而入迎接之禮捕羈之法咸若前說而或有所睹過所
 聞者寔可謂昇平奇觀也頃刻籠馬絕減三分之一則既過午暫閉
 捕場謂之中休亭上下簾而就哺啜同人亦傾榼倒榭或火飯或香
 瓜各適其所適為間復開場時埃風吹熱炎暉煌々衆皆雖搖箠當
 之尚苦難堪而乃捕夫賈勇与悍畜挑爭白汗汗血競流染沙竟擒

○成田參詣記卷三

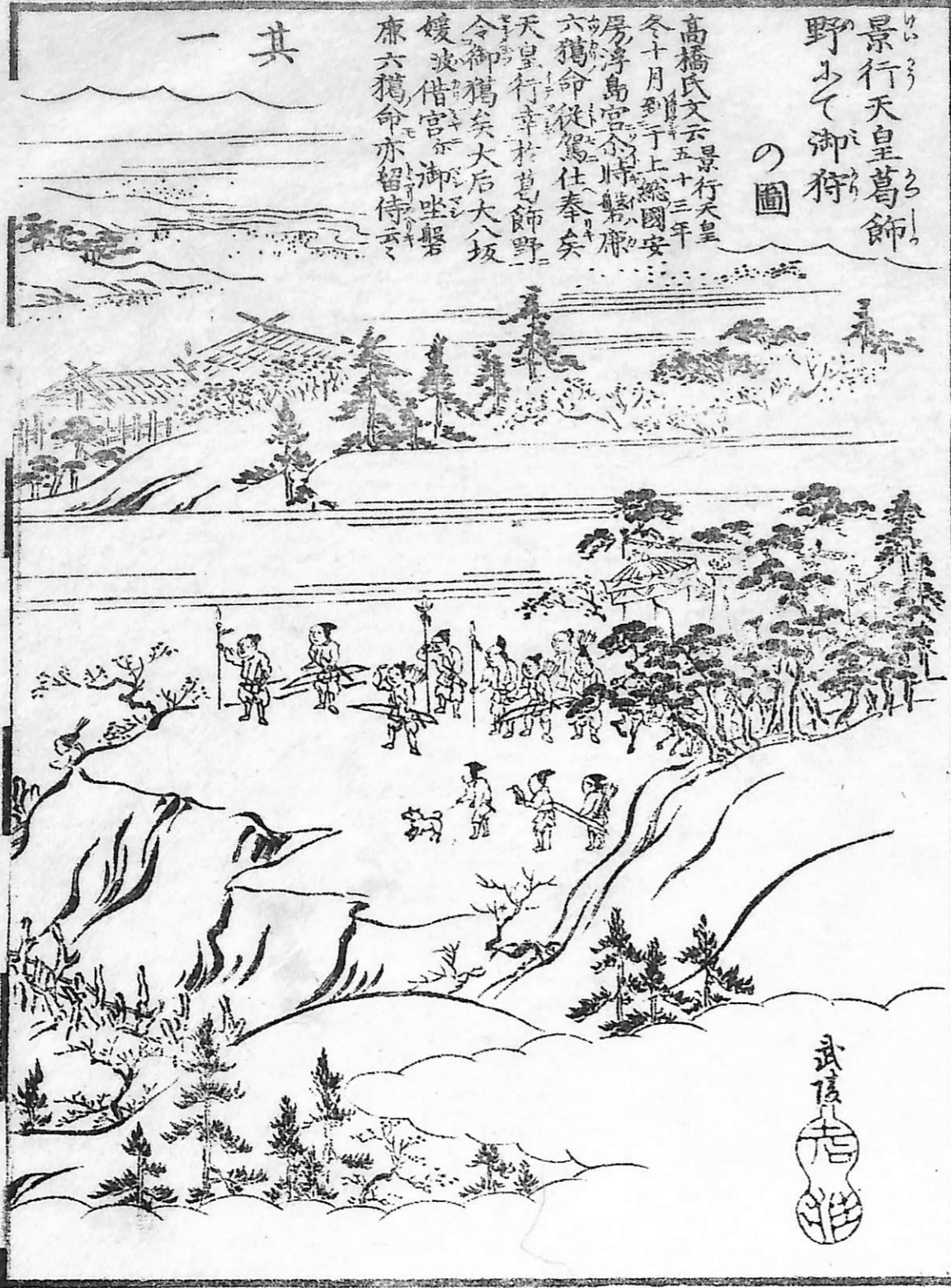
○二十三

景行天皇葛飾
 野少御狩

の圖

高橋氏云景行天皇
 冬十月到于上總國安
 房浮島宮余時繫麻
 六獲命從駕仕奉矣
 天皇行幸於葛飾野
 令御獲矣太后大坂
 媛波借宮御坐磐
 康六獲命亦留侍云々

其一



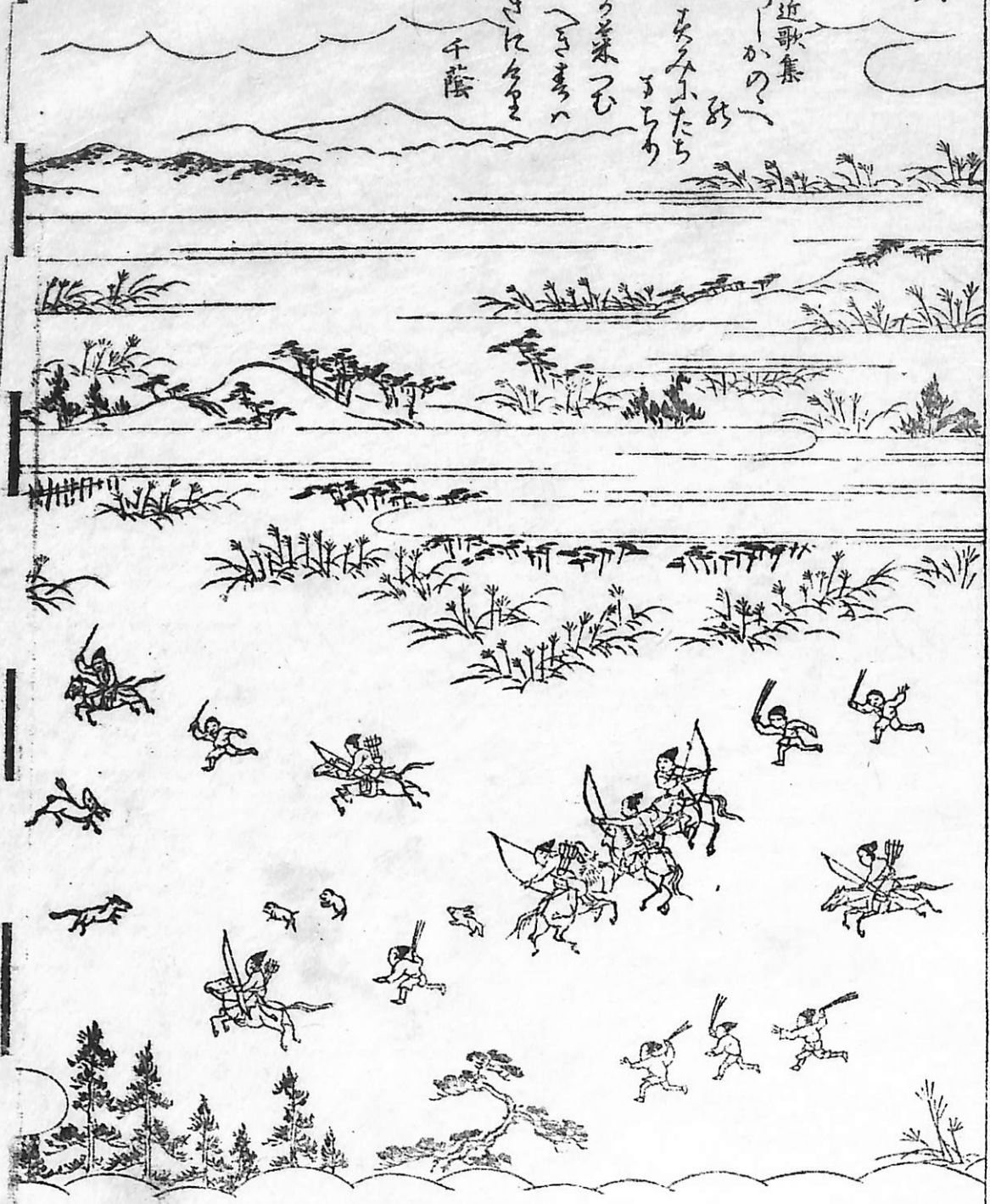
武後吉野

其二

名所近歌集

かみみふたり
まらり

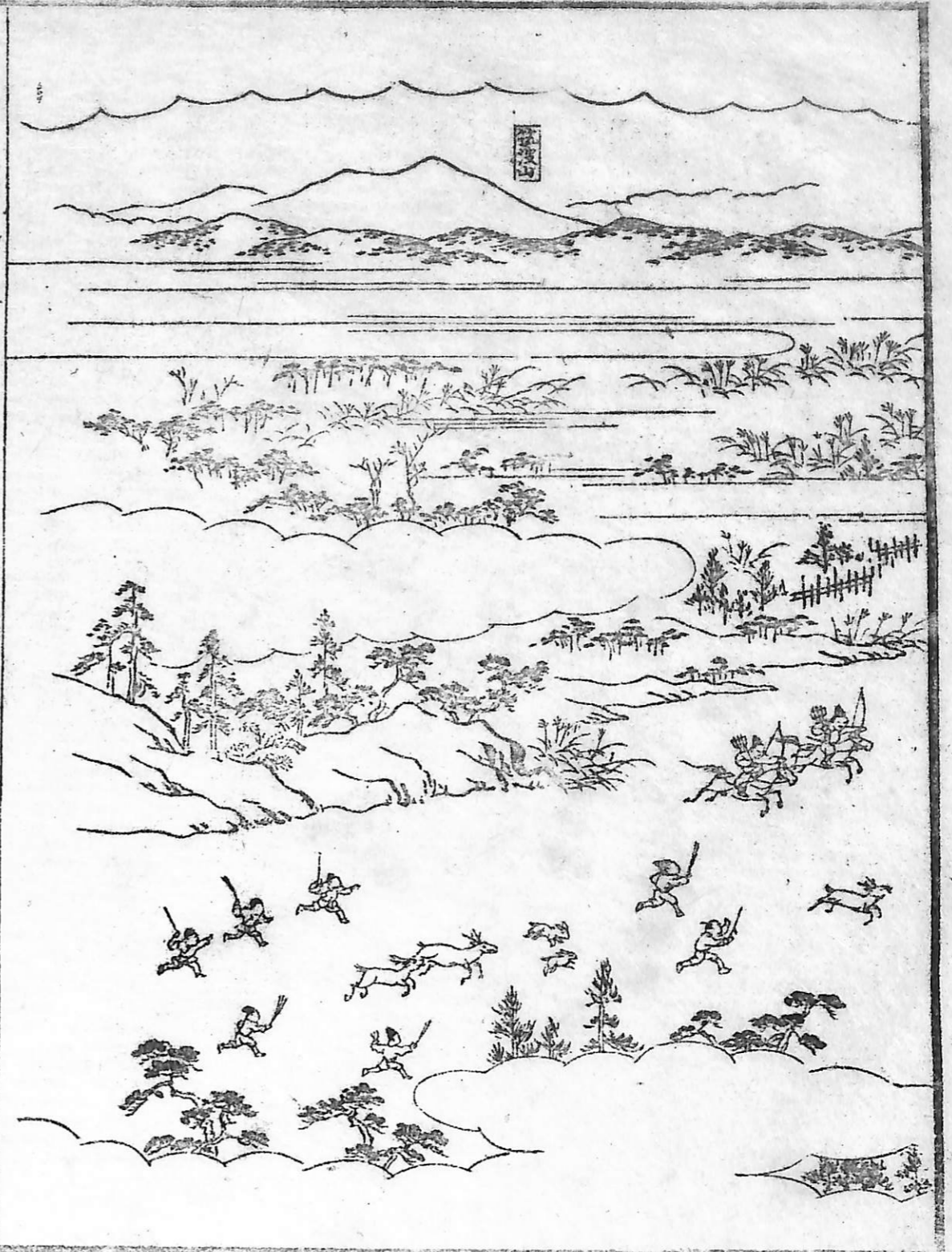
まらみふたり
まらり
千蔭



成田系譜記卷三



二五



○成田參詣記卷三

之而罷未設羈金絡月之飾已觀竊轡詭銜之態稍近日昃而又減
 其半觀者齊張虛勢若不忍放目二三子亦皆壯齡曾無倦色余業
 已憊老境畏歸途入夜與翁晉議而辭二三子割愛而去投側浮店
 啜茗茗幾椀解渴除煩憇息少時而再取舊路步且食烟行可十里
 易路北嚮度野傍林而走又十四五里而得村落距城尚遐偶認青
 帘隨量買醉而出一氣呵成入郭及還舍已黃昏揖翁相別浴訖便
 就寢夢魂猶彷徨于垌野間會如聽剝啄之聲驚醒而呼老奴伴出
 應門則二三子之告歸也時夜將半余卧不起榻上續殘夢此日寔
 八月初六明朝夙興記之翁名是芳二三子者服部俊秀竹内保定
 今井兼方從者乃余僕曰渡五○再觀執駒記上畧按舊志古昔東
 國有官牧信濃最大歲貢駒八十匹甲斐次之歲六十四匹上野武
 藏又次之並五十匹擇四歲以上應堪用者八月上貢若不中貢者

則充驛馬例以八月望勞貢使于粟田口是曰駒迎所謂望月駒是
玄惠庭訓舉信濃駒國風賦甲斐驪馬上野出駿載稗史併可以見
其盛於古而衰於今矣又觀或云武藏牧長獨稱別當則所謂武藏
野蓋亦刈牧也乃今不聞其有孳生馬而總中不惟前所舉七牧小
金原又有三牧曰上野印西高田臺亦綿貫所司也金作又二牧以
中下分稱房州又有峰岡並官使監之并前為十三牧於戲可謂
蕃昌矣不知武藏之牧何時廢而總中之牧何時興焉方平氏之隆
有秩父某永井等別當則牧馬猶存可知已總人或謂源公名馬生
食者出自柳澤然據盛衰記則生食磨墨並與人本吉某之所獻而
南部之產也東野之語豈足信乎鎌倉以降記載余少槩見且野乘
攸錄大抵詳於戰伐而略于制度矧室町之時幕府之令不行關東
則事實之欠詳不獨牧馬一件矣按宋史咸平六年四月令河北轉

○成田參詣記卷三

○二十六

運副使攝群牧事其後遣判官循行諸監取孳生駒二歲以上點印
之歲約八千餘匹凡馬群号十七左右字至退字毛物九十一種叱
撥至驃駁嘉祐八年群牧司言孳生監每歲定牝馬二千牡馬四百
歲約孳生駒四百以為定數是其為法与令所載大同小異周官曰
春祭馬祖執駒此條令不見義解亦不及之也其候不可得而攷雖
然舊志載八月貢駒事則執之當在六七月耳而今總中之役亦興
於七月至九十月而畢皆異乎周典矣問之土人曰馬陽物也喜寒
畏熱如冬春之際强悍難制至夏力衰故本以六月始至今遲一月
者蓋自官使監臨以來之例也此言似有理焉又按擬駕用者屬
牧師全生息者屬牧人見詩疏所謂牧人即令之牧子也亦今不
聞有此職直任其自然牧師時巡野檢毛齒而已然孳生歲蕃息者
蓋以水草之善故也則馬政所謂時出入游靡之節以宣其性情分

房棧北牡之別以_テ一其種者反不若任自然之靡勞歟左氏凡馬日
中_ニ而出日中而入正義云春分百草始繁則牧於坳野秩分農功始
藏水寒草枯則還概此周典之制也此等之法不見於今則蓋振古
所不率循也但南部仙臺里駒者或有畧似焉邪宋王應麟曰古者
牧養之馬有養之官有藏之於民官民通牧者周也牧於民而用於
官者漢也牧於官而給於民者唐也國朝始則牧之在官後則蓄之
民又其後則市之戎狄余竊以謂本朝古制槩唐典焉依南部之
法則蓋類於漢矣總中又雖官牧而不置牧人任自然是其所以異
乎歷代也寬政五年朝散大夫岩本君奉特命以親信領群牧使
始來臨斯邦先是執駒之役牧師預錄毛色膚第呈之典牧擇其應
捕者牝牡并執大夫建議革法不許取課馬爾後歲計孳生倍故云
余就典牧質牧馬數曰今年本藩所管三牧捕馬賣民者百五十五

○成田參詣記卷三

○二十七

匹而留坳者千七百三十二匹綿貫所司四牧捕賣八十九匹留坳
千四百五十五匹其他六牧坳廣狹馬多寡皆未詳之若以所聞則
並狹於所管三牧而馬亦寡矣由是推之群牧總數不浮五六千匹
耳較之漢唐盛時曾不及五十分之一矣雖然唐之初起得突厥馬
二千匹又得隋馬三千於赤岸徙之隴右監牧之制始於此可見其
始涓_ニ為而乃用太僕少卿張萬歲領群牧自貞觀至麟德四十年
間馬息七十萬六千可見其終洋_ニ為故昔人有言汧渭之間未嘗
無牧而非子獨能蕃息於周汧隴之間未嘗無牧而張萬歲獨能蕃
息於唐此得人之效也今總房群牧之地比秦汧渺_ニ則不足較魯
野區_ニ則有餘大夫果有非子萬歲之才邪倍獲什陌之息吾有望
於他日焉若夫克史張說之頌余雖無似敢辭其責哉○牧馬論上
畧談地理者曰本邦雖僻在東斷長補短將二千五百里果爾與三

代所謂中夏之域足抗衡焉而乃今總中群牧之馬不過五六千匹也其他與羽等州之牧暨内外閑厩諸蕃之馬亦可推而知耳中畧
 按宋史載本邦課丁曰八十八萬三千三百二十九蓋據僧齋然所對而記也繇是推之當時口數雖多不過三百萬耳寶曆戶籍民口二千六百六萬千八百三十而大朝暨諸藩士人陪隸並不在此數見官中秘策據此則今時總數雖少猶及三千萬耳歷年僅八百而增口殆乎十倍本邦氣運今而日開可知已

三山明神社 三山和名抄の山社領拾石 天正十九年辛卯十月別當祠官分領 千葉郡三山村小あり 三山の郷の地とあり 社領拾石 外十月別當祠官分領 社に傳ハ素盞男命櫛稲田姫と祭祀りと云毎年八月十三日小湯を此神樂あり此日祭日とトひ定め九月の内良日と撰むと云丑未の七箇年目小取分て大祭事あり祠官と三山氏 外小社家四名ありと云 別當と神官寺と云

○成田參詣記卷三

○二十八

三山明神社の圖



蘆庵

神の代より
あつたなり

上り
はくして

まじり



○成田叅詣記卷三

医王山と号し新義真言宗吉橋村常福寺
小属長本尊系師如來開基詳なき

氏子村千葉郡よそ廿一箇村あり

○神名帳考證土代伴信云寒川神社儀式帳寒川比女命信友云千葉郡

寒川新田と云所小古社あり今ハ神明と称す社ども式内寒川神社あり

村人の中あて鑑取と云と撰定て神事小預らむ神体ハ所謂御幣

小て祭日小新小調へて舊物ハ海に沖持出て流るなり此神灵験

著きと常にて云々寒川の本村よそ神明宮あり社と云々新田たると

後小勸請一祭社と云文政十五□記

○或傳小此社と茂呂神社なりと云ハいづのいとも云く古く棟札小茂呂

また茂呂神社再造堂一字成就謹言とありと年号ハ詳なきと云へといふ一書傳
なりと社と天明元年祠官三山氏より吉田家へ差出せし書状ハ二宮明神の
茂呂神社と申姓古より鎮座
と云々と書ア一と云

○或人の説小此地元葛飭郡なりと云元禄中千葉郡小段ア一あり

と社と元禄中より葛飭郡小属した社と千葉庄と稱して元

千葉郡の地を多葛飭郡とあらはに猶植生郡と香取郡植生荘と稱せ
しと同一ことなるべし植生荘ハ舊より植生郡の地にて貞享三年より
舊小復して植生郡と建らねたり

○寒川村ハ天正以前まで結城と稱せし地にて此地方は楚と今も結城楚
と稱し結城山万蔵寺と云寺もあり新田ハ日向寒川と云所あり此地

小結城明神と稱する社ハ信友社寒川神社といふ此と云へたるは
香取私記佐倉風土記ハ寒川神社ハ寒川村にありと云へると傳説

のまゝと記せしめて共小澄といふことにて寒川神社とて必寒川村ハ
ありとて之を定めたるは郷村後世ハ種々に合せしとを終一概小論

難く既小本州小松神社ハ小松村にありて神崎村にありと
地にて神ある故神寒川神社も此類なるべし神名帳小相模國高座郡寒
川神社大とあり後式帳小宮川中古命寒川比女命加波一宮記小相模一宮寒川村社東鑑一宮佐河大明神と云たり和名抄高座郡寒川と云

○成田泰諸記卷三

郷あり訓位益加波今三浦郡に在り海と寒川神社ハ相模一宮小て祭神素盞鳴

尊奇稻田姫とて本地薬師如来あり此宮山を三山も同じ名し
祭神も共小素盞鳴尊奇稻田姫命を本地佛も亦薬師なり彼此合

考社ハ寒川神社なるを推知するなり又此社号と二宮と稱は二宮ハ神
名帳に位次小て香取と一宮と一寒川と二宮とせし号にや或云船橋の意當外小て一宮

此社ハ茂呂とて二宮なることと延喜式に位次ハ
茂呂神社ハ先もありて意富比神社ハ後なることや

千葉妙見社神事に造り舟と出せり千葉より出ると千葉舟と稱し寒川
より出ると結城舟と呼べ結城朝光の母社寒川尼と因り地名なり

延喜式に比はなる地名とあり内野小三山塚と云ありらなることなる酒と井小三山勘解由と
云家あり此地より出く苗字なり

○知名類聚抄小千葉郡に郷名七を載す千葉ハ千葉町山家ハ御山村に

地小や池田ハ猪鼻山へ登る坂を池田坂と称す終に千葉と寒川との間小あり
 一なるく一三枝ハ作草部村糟菘ハ 黒河春村ニ花類聚名義鈔ハ見ゆ 加曾利村ナ
 らん山梨ハ今印播郡山梨村物部ハ同郡物井村ナク一べと一呼庵と井と
 錯るハ中昔よりハ此六とナらん

時平明神社 大和田村小あり 往東の北 祭日九月九日氏子村と称する村四村

所謂大和田萱田萱田町麦丸小あり 此等此地時平公庄園と見えたり

幸谷本郷波佐間小も時平公と菅公と合せ祭ると云両公此庄園なと小あり

見ゆ 下野國誌卷四小安蘇郡古江村小時平明神あり

神明社 萱田町小あり 此地及萱田村ハ伊勢此御厨の地小て 意富此神社

神明と祭祀又萱田村此飯綱權現と称する神あり 毎月廿四日此

神あり 本地不動明王 長鼻狐小の 福荷神社考に廿小飯綱權現と云ハ信濃飯塚山此茶吉尾ナリキ

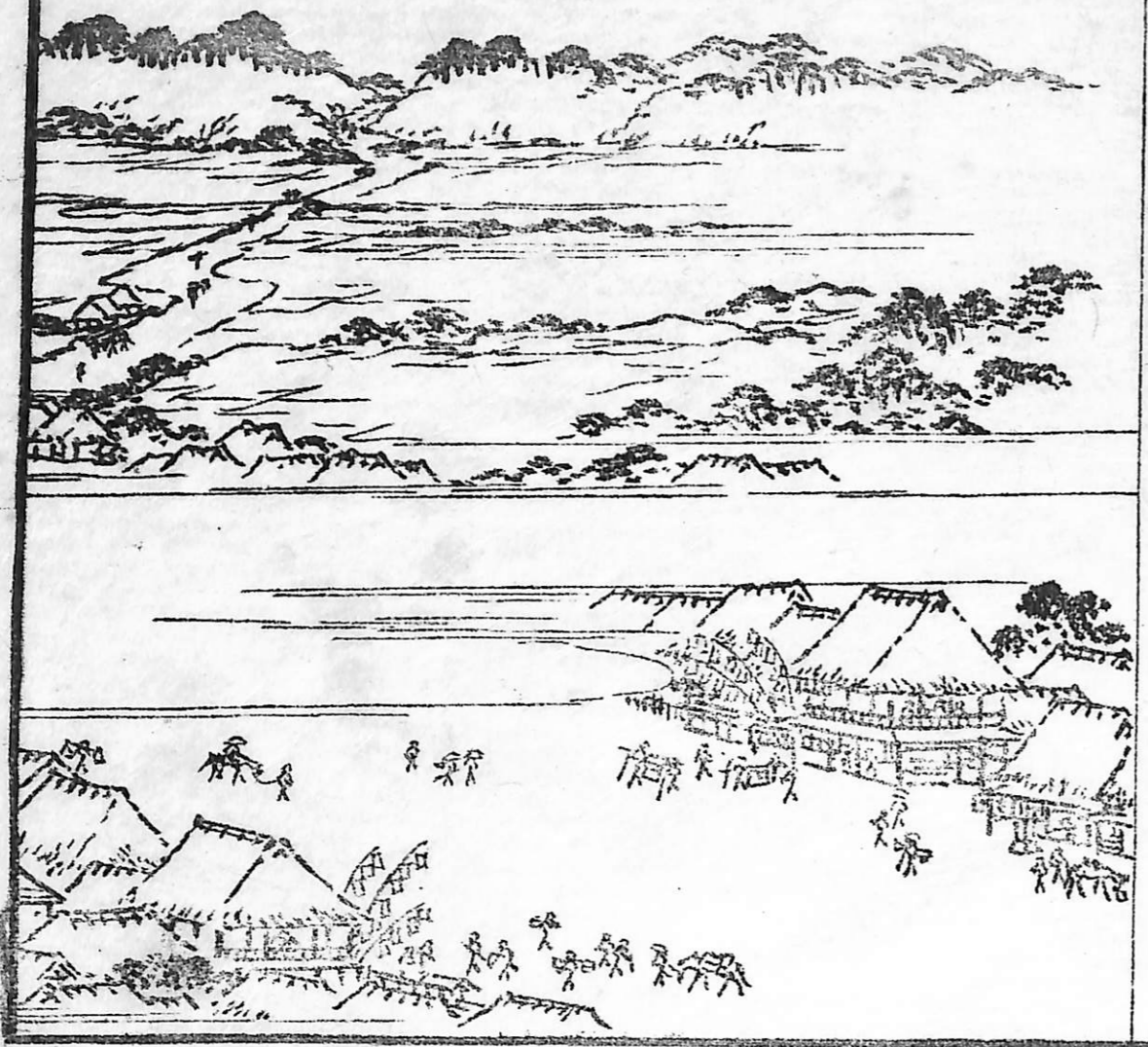
○成田叅詣記卷三

○三十一

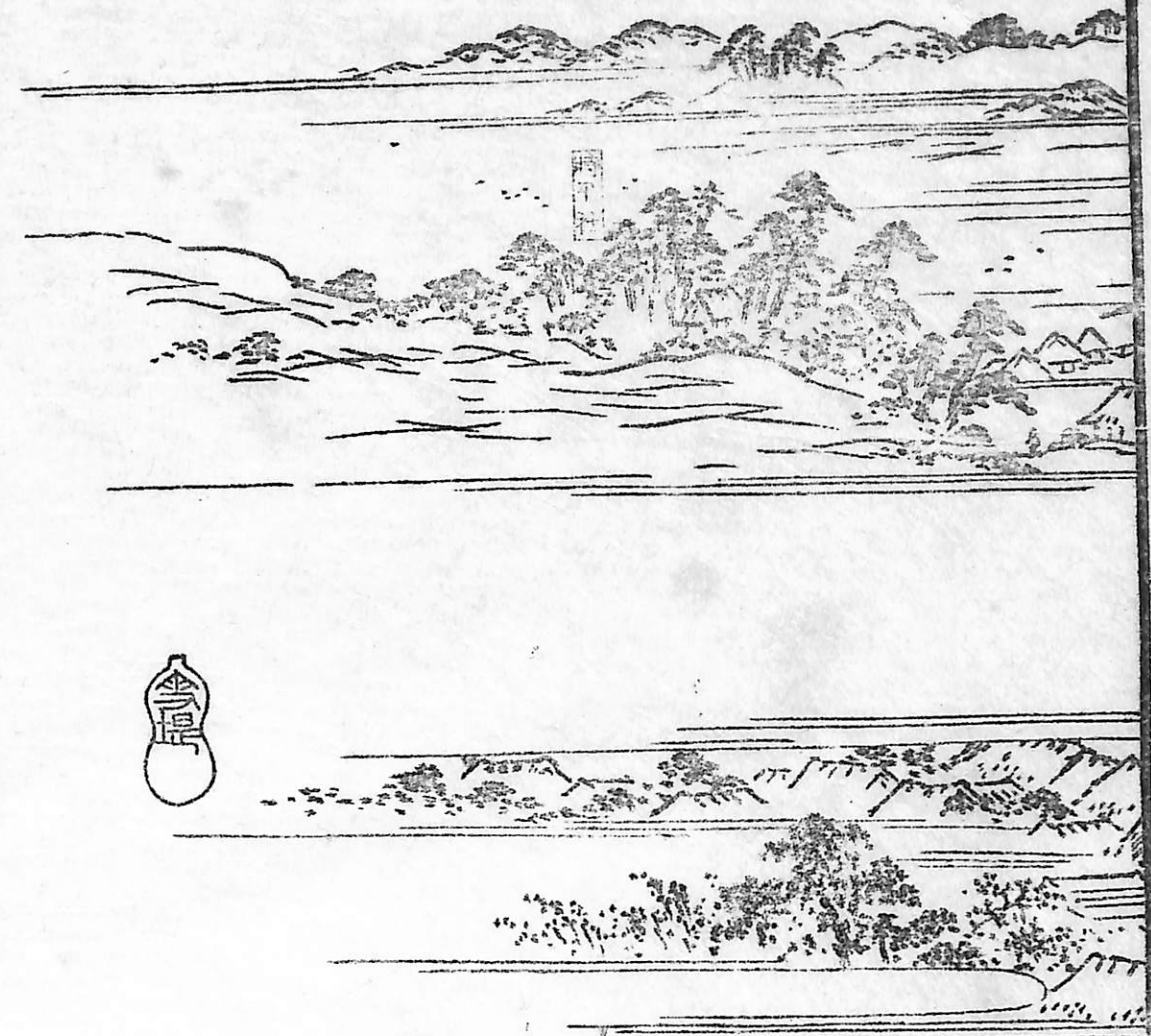
大和田

驛の圖

正伯新田ハ本名藥園臺村
 ト云昔シ丹羽正伯ト云官医
 藥園ヲ取立シ地ナリ其後日
 光山へ移サレ今ハ名ニ存ゼリ



加賀清水ハ 大久保
 加賀守佐倉三居城セシ
 迷職ノヲリ常ニ愛シ汲
 レシヨリ加賀殿清水ノ
 名ナリト云

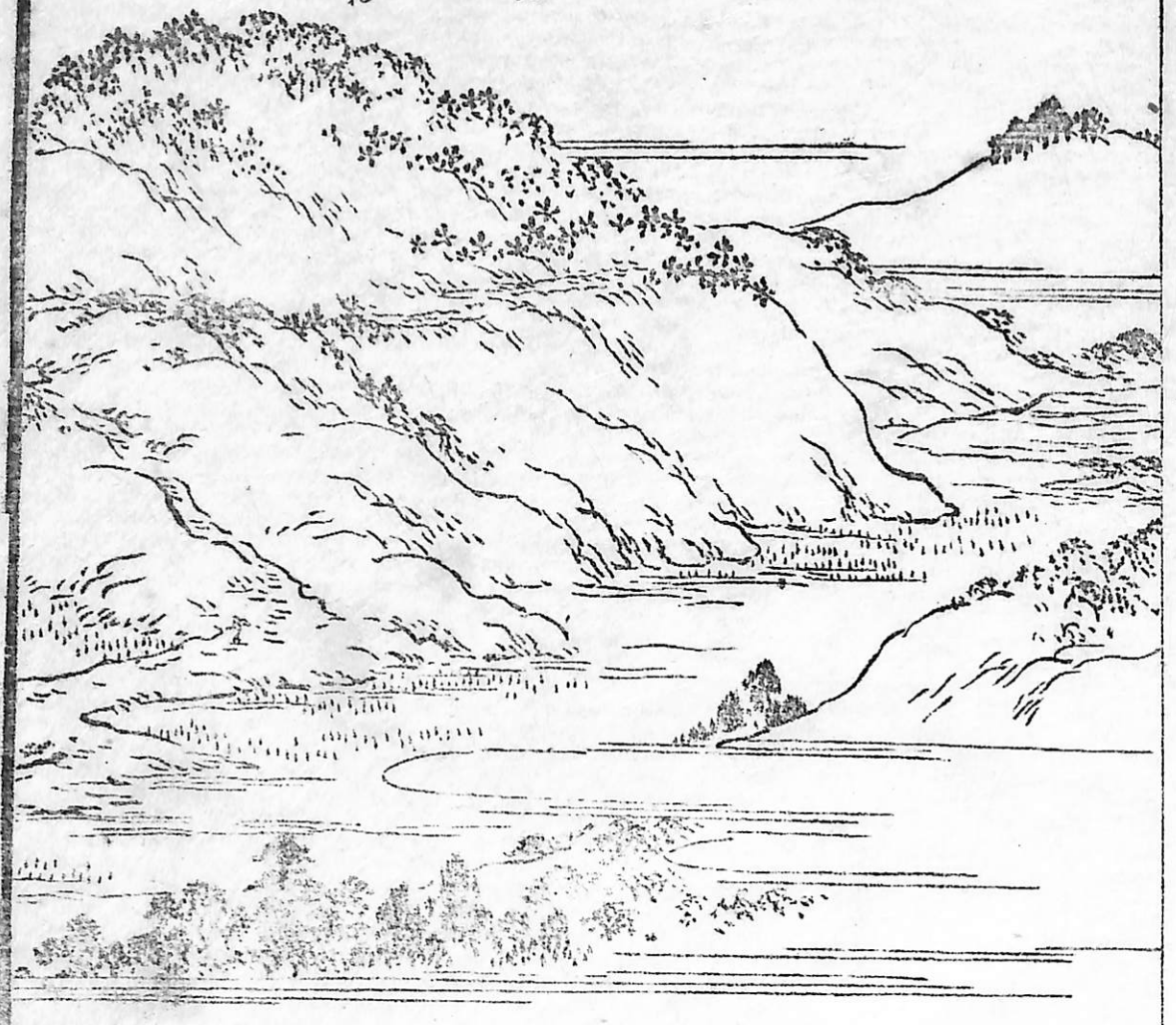


○成田参詣記卷三

三十二

印幡沼鑿開趾

惣深新田ふあところの基
 磐を目撃はる観の如く見
 え色少一黒一所謂観の本
 本の色少一色小黒一埋
 本の故あふ一



德源新田香取某家所藏
埋木碁局識

天明年間官命鑿印波湖之南將
以達海約齋香取君之祖考率眾
山丘貝殼出者許多至高臺而掘地
五丈巨木出亦多大率毀為薪擇其
善良者以為書架一則造此局其
湮晦幾許我蓋數百年前之物也凡
材之終不朽滅如此歎

東都北溟陳人記

文化五年壬辰十一月



○成田恭詣記卷三

○三十三

加賀殿清水 井野村は原の中ふあり 大和田と井野との間あり 大久保加賀守利常は

職のそり毎少此水と賞一飲せしる 加賀殿清水と云名と負せたりと云

長谷山宗徳寺 白井甚町ふあり 寺領拾石 天四十九年 禪宗曹洞派陸奥

永徳寺未なり 本尊八般若船觀音寺は傳ハ應永は昔一原四郎胤高と

云るもの 建る所なり元八千葉郡北小弓柏崎の地ふあり報恩山と号せし

を天正三年胤高七世は孫式部大輔胤榮小弓白井は西城と兼并せし

此地は長谷山龍雲寺と云寺合て今の寺号となり 陸奥膽澤郡永徳寺二世

巨海は法嗣聖山志賢和尚と傳ひて開山たり む 弘享元年己酉 堂上小胤

榮 天正十年丙午四月六日奉法 号竜雲院殿私岳太宗大居士 の子胤義は神主と安火 天正十八年庚寅六月十八日奉法 号大賢院殿家藏通檀大禪室門

又原氏は系系と蔵は域中原胤榮の墓あり

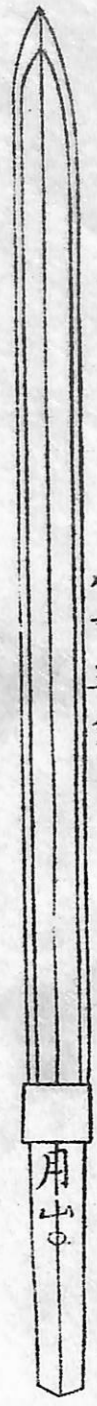
○里老云寺内小甘泉あり 権現水と稱は葦長は昔一 神君此地小將せら

社一をを此より八京師柳はふ小似たりと仰せら 終屨目蔭寺は清水と

此御意あり供御に用ふ充せらるる後 台徳公又台駕とらるる終清貴
 味ありしとふ當時此寺深林の中にありし日蓮寺に名をとりしをば

所蔵古劍

八寸五分



瑞湖山圓應寺 白井田町小あり寺領廿石 天正十九年 禪宗臨濟派小て京

師妙心寺小属は本尊ハ釋迦如來開山ハ佛真禪師ト云寺ハ傳ハ白井興

胤幼日家難とけ鍾倉の佛國禪師より後歸國を事と得て志津

氏の乱と平らけ佛國に法嗣佛真と請て此寺の開山と云 牌子に田應寺殿江
 鑑行胤大居士貞治

三田申四月十六日奉中興祖平身胤と見ゆの弟二世道安和尚ハ
 真胤ハ二男なり此寺を本領に十分一と寄せしと云

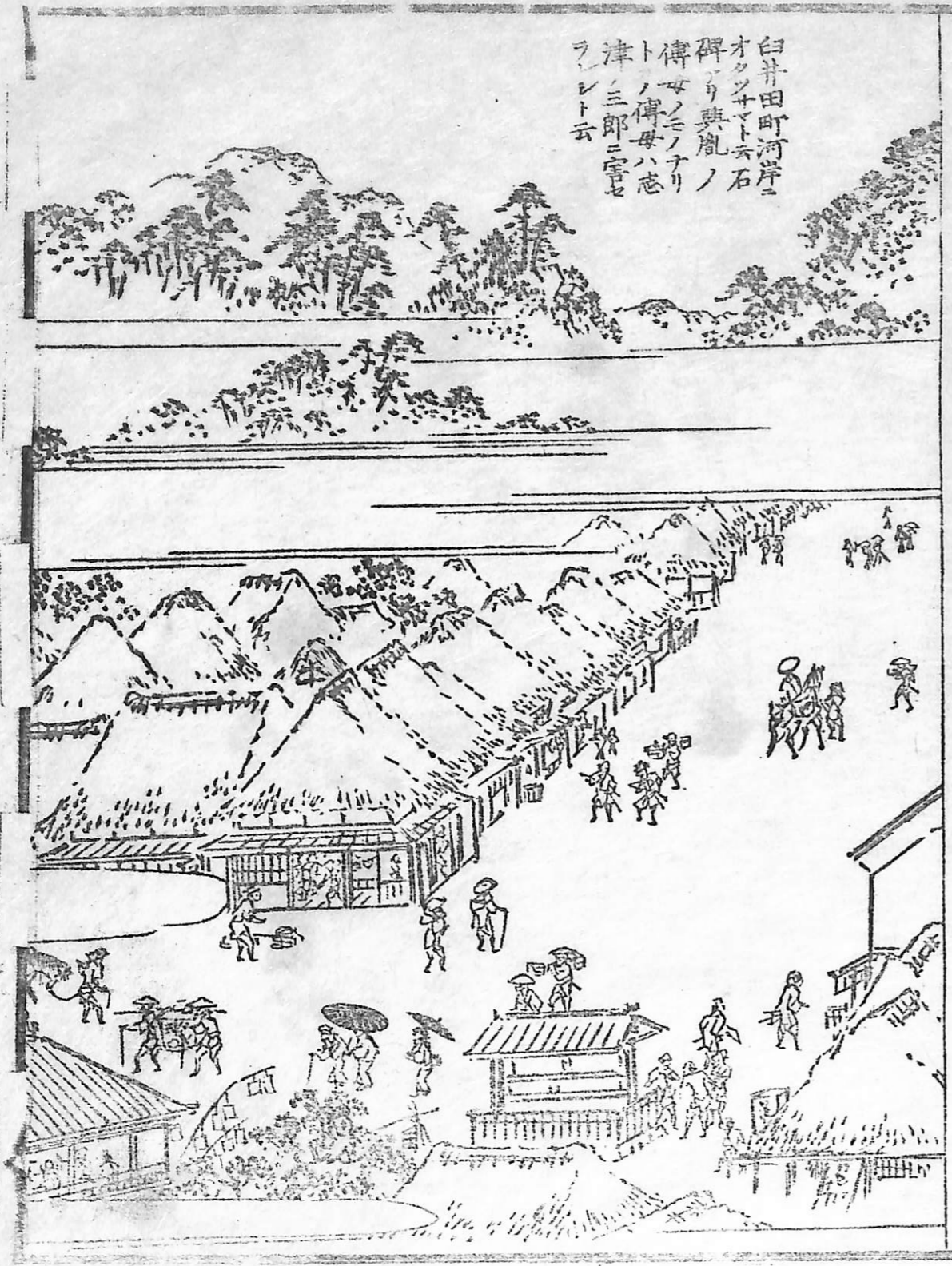
白井古城址 白井村あり 今此處町に往來と大名宿と云田應寺より南の方へ出たる地と中城と云又外城基あり 白井常康

此居所なる長元元年始て白井に居城と定りし此所謂常兼六堂の一を

○成田恭請記卷三

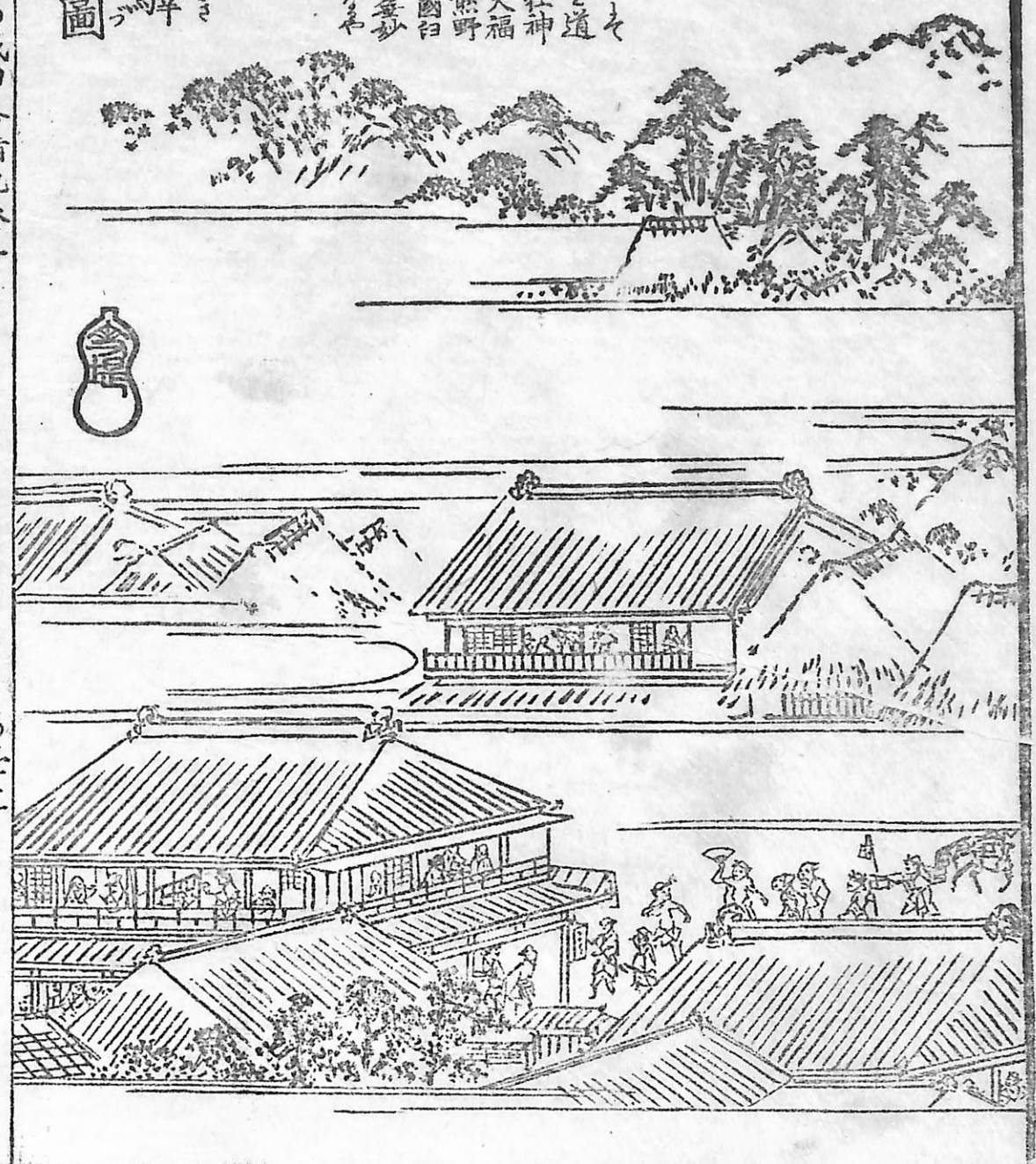
○三十四

白井田町河岸
 オクサマト云石
 碑ハ興胤ノ
 傳ハノミナリ
 トノ傳母ハ志
 津三郎三雲
 ラレト云



玉環川小伊勢とて
他國の春宮入と道
者と云り小慈社神
鏡沙汰文中に天福
二年の文書小慈野
詣の道者下総國白
井郡の信人南無妙
房とあり何人なる

白井驛
の圖



○成田参詣記卷三

〇三十五

王常康（常子）孝忠（常忠）孝忠の子盛常（盛子）盛常の子祐胤相嗣て此小居り葛飾印
播二郡の内百十餘村と領せりといふ
百十餘村と領せりといふ原氏の代のさきと云ふは
孝忠の時と白井庄二十村の地ありしなり

○鎌倉大草紙（下巻）小千葉介孝胤ハ先年父陸奥守八道常輝と相侍ひ

故胤直兄弟に腹切せ成氏一奉仕人として成氏より千葉一跡と給ふ

たつ身後胤直ハ一跡として實胤と千葉介小任一上杉より下総一指

遣といへとも成氏より孝胤と眞負より千葉より居たり終り了間實胤ハ

千葉城一入部不叶として武州石濱葛西邊と知行して時氏待て居たり

一の世中と述懐して道立して濃州より上りて閑居に其兄は自胤と上

杉より取たて實胤ハ跡と給ふと千葉介に任に武州に千葉と跡と

今度千葉介孝胤ハ景春と一味して所として合戦して又成氏上杉と御

和談の儀不可然之由孝胤より小さままたけ申間孝胤小杉と御敵

の随一也此時令退治自胤と取立て兩總州を侍過半自胤ハ付て千葉

跡可令相續ついでついで為な小西上杉こにしじょうさき加勢かぜいありて成氏なりし一此この一肉意にくいとえて太
田道灌下總國國府たにのみちかんげさうこくこくふ其その陣城じんじやうとてつけり同十二月十日孝胤ハ
原二郎木内はらにじやうもくうちと先まづとて下總國境根原げさうこくけいねんげん出張しやうちやう以道灌馳向合戦みちかんちやうがくせんとて先
終日戦しゆうじつせんひらし孝胤ハ打負うちまひて木内原以下悉討死もくうちげんげふぎやくし了殘意ハ白井の城小指
龍明文明十二年正月十八日白井の城ハ押寄おしよる道灌ハ帰陣きじんして太田國
書助しよすけと千葉自胤ちやへみづね兩大將たうたうしやうとて攻戦せうせんふとつども寄手ハ小勢せうしとて叶ハは管
領御馬りやうごまとせられ可然こぜんとて望のぞとつども是これを延引えんいんし敵ハ要害やうがい結むすして
力ちから落おち小難こがた落おちとてつども勢せうとてけ上總國長南の城主武田三河入
道ちゆうだうとて免々めんめんとて七月五日降参かうさんして自胤小帰服みづねこきふく丸まる答こた上總介じゆうすけも
同自胤ハ降参かうさんと下總國飯沼げさうこくいひぬまも落城おちじやうして海上備中守師胤かいじやうびちゆうししゆんも同自胤ハ
降参かうさんして自胤千葉ハ入部いりぶハとて先とも西總州大形自胤ハ帰服きふくとてけさあ
りた先長陣せんちやうじんをせり帰陣きじん有あべしとて七月十五日陣拂じんはらを体ていと見て城じやうよ

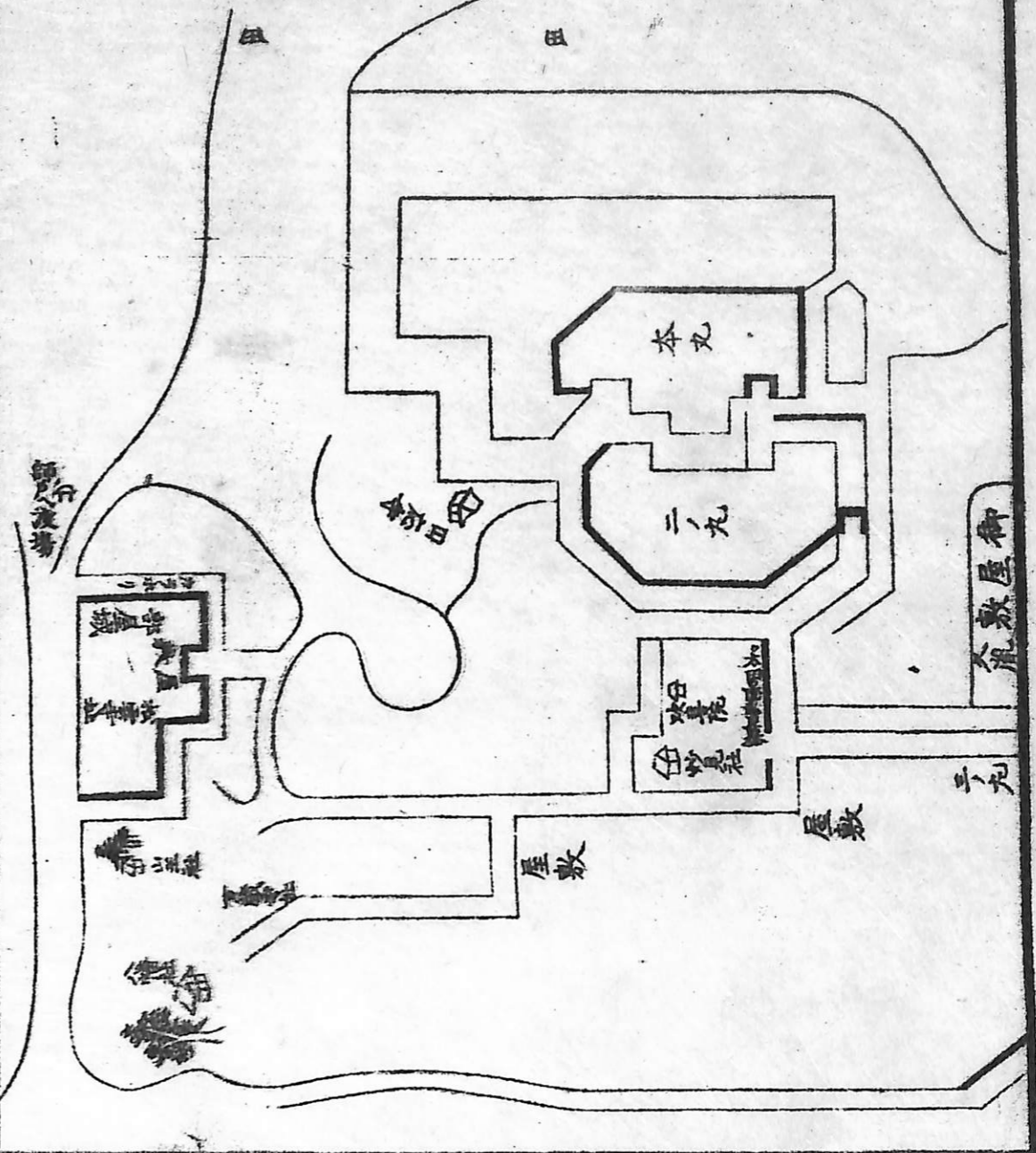
○成田參詣記卷三

○三十六

里切さときりて出いけ行ゆ太田國書助資忠たにのくにすけすけ取とて之これ一攻戦せうせんとて付入つひい小打こうちて入城いりじやうと終
小責こせ後ご免々めんめんとて太田國書助たにのくにすけと初はつめ僧中納言佐藤五郎兵衛桂燈殿そうちゆうなごんさとうごろうべゑけいとうだん
助以下五十三人討死すけいげふごさんちゆうし孝胤ハ敗北はいはくとつども味方あじかたも長陣せんちやう小勞せうらうしてつて
を責せ入いらるら自胤ハ石濱いしはまとて開陣ひらくじんす然しかとつども白井城ハ自胤領みづねりやうして城代
とて免々めんめんとて

○總葉概録云常兼の三男白井六郎常康印播葛飾兩郡少て百十餘村
と分ち領りやうして印播郡いんぱくけん并ならび城小主じやうしゆとて頼朝卿よりとも小屬せうぞく一勲功いんこうあり其
子常忠つねちゆうより四世祐胤すけいんより分ちて千葉ちやへとて同おなく鎌倉かまくら小奉仕せうじ正和三年しやうわさん花園院はにわんいん
條高時じやうかうとき八月七日廿五歳はつげふしちごさいとて病やまて死しせり其子竹若たけわか生なれて三歳さんさいを終しゆう祐胤すけいん
命いのちとて弟志津城主せつじやうじやうしゆ志津せつ在あり次郎胤氏じやういんぢと後見ごけんとて然しかとて胤氏いんぢ義ぎと變かじ竹
若わかと殺ころして白井しやくせいの城じやうと領りやうせんと傳つたへ愛山あいさん岩戸いわと五郎胤安ごろういんあ命播郡みちのけ岩戸いわと在あり城
軍いにて城じやうと圍かこむ胤安いんあ手痛ていたうく防かまぐとつども寡敵こくたき小衆せうしゆ不敵ふたきせりて家族かぞへ
とて亡滅むじやくア後小時ごごうじ靈怪りやうかいありとて一寺いつじやうと建立たうけんして西福寺さいふくじやうと名なく山伏さんぶつの流女りやうによ小

文禄二年酒井宮内
 城代時城内ヨリ
 出火之城ハ申及ス
 圓庭寺モ昔シノ
 殿堂焼亡シ佛像
 五十四尊其外佛
 經等一時灰燼
 トナト云



○成田參詣記卷三

氏猶も多禮の事多うけけは三年八月十四日白井の城の隍凌於普請
 不託一志津の士卒と白井不呼集め其隙と伺て志津の城と圍み攻る事
 甚急なる亂氏防く事あたりに自殺す其妻屍骸と抱き城に火とけ
 け其身も共不獲死す貞治三年四月十四日興胤率一其子尚胤これと
 繼永徳二年十一月三日卒に其子太郎冬胤繼應永九年八月廿三日卒
 其子長胤繼右衛門佐と稱す永享二年五月十二日卒長子教胤繼初子
 たりし故子兼介孝胤の次男四郎持胤と養子と以後不實子とせむ備前
 守俊胤と稱す寛正六年五月廿三日教胤率一て持胤これ不嗣とし十三
 年太郎為胤次男左衛門佐幸胤とて二子ありけり家督と俊胤不譲り
 て文明九年五月隱居せり十一年正月十八日太田道灌二階堂七堂ホ一系
 騎りて市川と渡り白井城と圍み攻る事俊胤謀と設けて防さる
 胤又援兵と出して攻る事は間六月ふりて七月十五日大小戦ひ道灌の

兵敗北一舎弟圖書と城中一討取る圖考の墓の井 十八年二月俊胤家督代幸胤小四つりて退き入道して玄光と号し是年持胤率ちり延徳二年六月十九日幸胤十九歳りて死し子なき故孝胤の行らひて俊胤入道再び城まるとなる永正十一年正月長子太郎景胤小四つり隱居して同十四年五月十七日卒に景胤八知治三年十月十五日卒して其子久胤家督たると左近と稱して年僅小十四歳なりけれ景胤病中小に社と患ひ進み縁者ありけ社原上總介胤貞と招て後見と頼む胤貞心小一物ありて一ヶ月の中十日つ、臼井に居て郡政を管ふ小となく興り行ひ禄と施し諸士と懐け貢税と軽くして百姓を養ひ私恩と施しける故領内社士民自然と胤貞に懐き從て久胤八有るを益と如くたりゆき城門の傍小宅と營てて社小居し今其地と所屋敷と云部屋城とも云お屋敷寺 其旧跡 本城小胤貞住居まると依て久胤八結城小走りて結城晴朝を憑

○成田泰詒記卷三

○三十九

欲さけ社晴朝百貫地と所たへ十二人圓連判の衆小列に上人小水谷多印井黒田小塙繁谷鹿窪 後小水谷出羽入道小屬して孝陸國下館小居に胤貞神方残片貝是なり 愈威勢と震ひ織田信長卿駿馬と献して臼井小弓の兩城まると稱し礼 福四十年四月里見義亮家臣正木大膳として臼井小弓の兩城と攻て是を取ると同五年貞胤謀と巡らし小弓城と取復に同七年四月十一日臼井の城と取返す同九年丙寅この前將軍義輝 上杉謙信臼井社城と攻る時甲陽軍 八取福二年己未 結城晴朝先陣と情ひ胤貞と撃て久胤と復し功者ありて 秋葉小居なる故信ゆきかん 社を惡くを理攻小責りて諸平空堀小居入ると土居崩社て悉くうた社大不敷社て引取る生管に謙信 胤貞は附城の址あり □武部千葉重胤社後見して小田原の城小薙り小北條滅亡小及り 天正十九年五月十八日 東照神君酒井忠次と遣り臼井社城と取めり小結城へ走り久胤八天正二年七月五日下午館して卒し時宗の道



武後志

場藏福寺に葬る三子あり長と將監忠胤と云次と平十郎季と右近村
 胤と云皆水谷社家に生長す忠胤病て仕と罷て死し後なり平十郎ハ
 下館と去て攝津國大坂小流落して終る所と知れ村胤ハ始終水谷家に
 仕て明暦元年十月廿八日備中國松山に卒し壽覺院と云寺小葬ると
 以上概録は知海ハ
 松山貞辰説あり ○ 志津三郎某用年三郎某師久四郎某
 岩久五郎某白井家四代と稱すと云
 田應寺脚子三葉介常兼三男白井六郎常康三五代末裔太郎景胤法
 名天岳常輝景胤子久胤子子村胤 寛文十二年辛亥十月廿八日村胤子

○玄仙本白井系圖

平益胤志之トアリ玄仙本へ年月ヲ
記セシハ脚子ニヨリシナリ

白井常安 — 田井二郎成常 — 六郎盛常 — 常清 — 太西胤常

左近將監興胤 — 某 瑞湖山田應寺關山之道庵 某 六郎尚胤 永和二七月五日 某 左近將監包巾 太郎冬胤

右近佐之胤 — 左近將監 — 四郎持胤 — 備前守俊胤

左衛門幸胤 — 太郎幸胤 — 左近久胤 — 以下畧

○成田泰詣記卷三

○四十

△景志
△此系常康ヨリ興胤ニ
至ル間詳ナラス



上杉謙信白井
城攻の畷
生谷村三十塚ト云リ
此地上杉謙信ノ附城
址アリト云

○成田泰詰記卷三

〇四十一

諸國廢城考

白井城文明十一年七月太田道灌攻て去終と隔る城主永

禄七年三月上杉輝虎當城小谷向は城主原武部大輔ハ九代後記作上徳介

千葉介國胤は近臣より累世此城小在りたる輝虎近日谷向たるの由

聞えけきへ千葉介より推津権名以下數百騎小田原よりも松田孫太郎

并与力引具して楯籠る去程小輝虎衆可田柿崎内藤長野太田美濃守

其子梶原と始として唯もみりもは後せと一旦由取攻ら終ける城中よ

りも突て出で散る小戦々々越後勢數十人討終るはあけ具と吹て

人數と繰入る廢小城より追うけ突て出越後勢と追立切て廻る武部大

輔も是と見て城と拂て突て出々此を敵ハ散るに突立ら終はうく本

陣へ引返り輝虎此有様と見て叶くさと思ひけん頼て人數と引て

お入る天正十六年五月豊臣秀吉諸將に命して此城と攻む武部大

輔支拒る叶は遂不出て降る十九年神祖酒井左衛門尉家次左

衛門尉家忠日記宮
内太輔今道行實録
と本國小封に此城小居て三峯石と食む慶長九年家次

と上野高崎小改め封に△古戦録永祿七年三月廿五年四月小作り原武部大補
と上野介胤繁につくる又云推津主水正推名孫九郎

五百餘兵と添て二の郭を守りむ大和田此峯小南方松田孫太郎康郷
ともりて開とひく百五十人召遣印井とせつて四月廿日の曙より戦始まる

太田圖書墓 白井村歎喜院と云寺の辰巳の方にあり 寺前小

八幡社 天神社 共小同所あるも里老云白井興胤足利尊氏小説て菊池と

筑紫國多て羅漢濱小戦ひより筑紫兩社小祈り名ありは社ハ二社とこの地小景祭

一推と樟と宇佐より持来り八幡社に植へと云山王社小も老楠あり 田町高崎某
氏神なり

共小其時おものをも印西より多て羅漢村あるも興胤多て羅漢の事以因と何る

村名よ瀬戸村に宗像明神社あり是を筑紫より移し祀らるるべしと云

八幡社前石燈籠識

白井村願主 平宗憲男 川口宗建

八幡宮御寶前石燈籠

寛文十二壬子年十月十五日

外一基ハ平宗建室藤原氏女ト識セリ
川口家ハ元此地ノ地頭ナリト云今深川六
軒堀川口熊五郎高千七百石此家當時
八幡ノ社領若千ヲ寄附セリトノ陣屋址
臺町ニテリ墓ハ實藏寺ニテリ

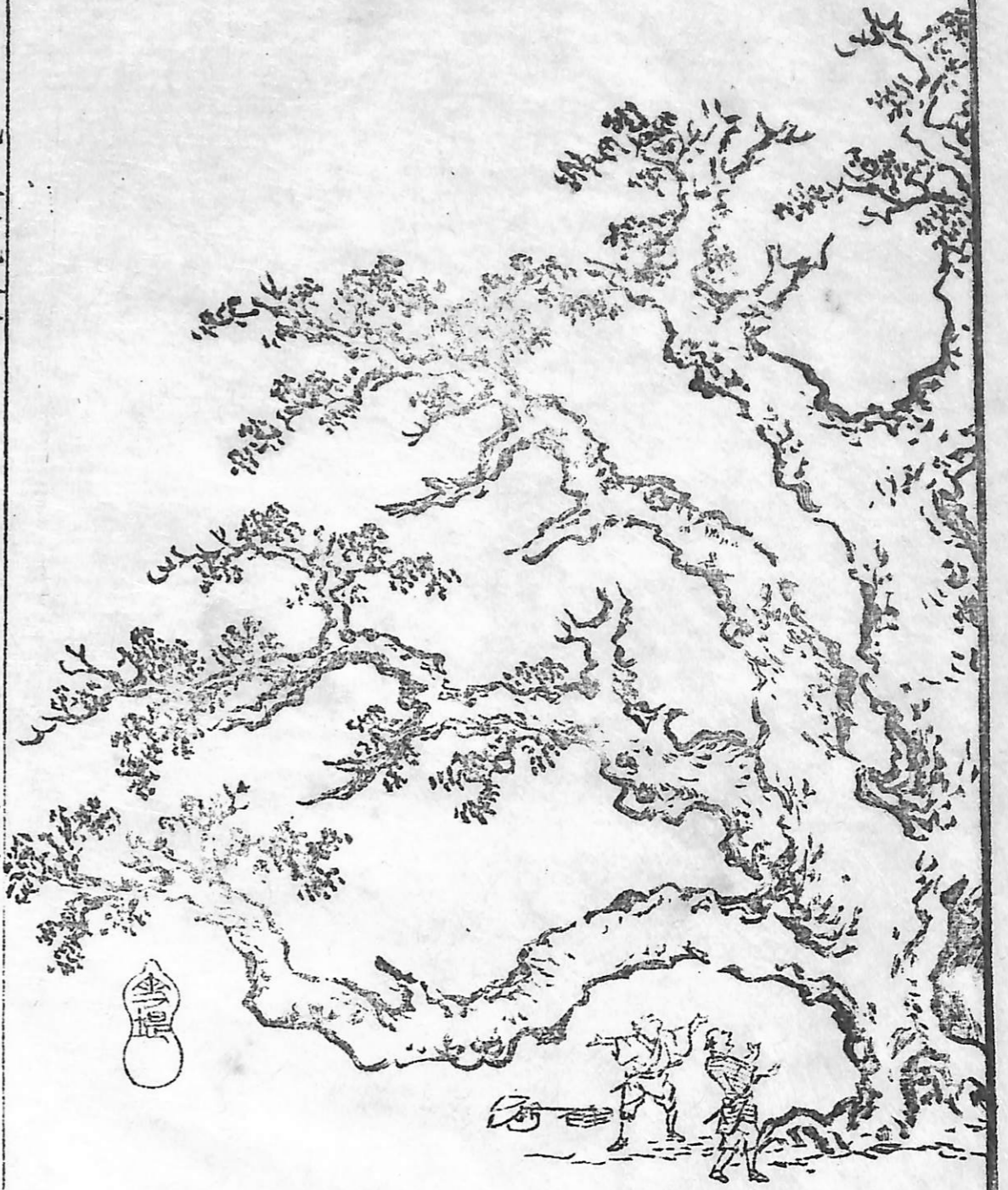
○成田泰詣記卷三

○四十二

白井山王社老楠の圖 周圍五丈餘

相傳延元元年白井興胤筑紫より
持来り植ル所ト云





本覺山淨行寺所藏机識

日蓮上人像御腹ニモリ法華經八卷アリ

天正拾叁年乙酉

下総國臼井淨行寺住物時代日胤

奉奇進佛經拾部并机拾桶二壺成就祈者也

大願主原越前守御内施主教白

六月拾貳日

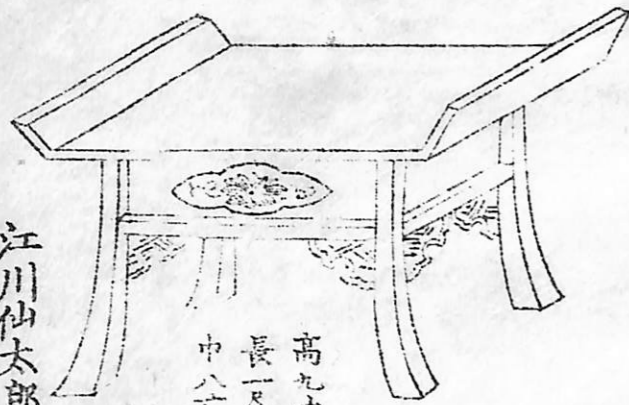
日蓮上人像臺裏書

天正十叁年八月二十二日

原越前守御之

臼井ニ由井山光勝寺ト云時宗ノ寺アリ此寺ニ關王像アリ首命ニ識アリ云
 此御首小野篁作也光勝寺ミト見ニイカナルニエヤ 或記ニ常祐代
 遊行ニ代真教上人下総ノ國有シ時歸依ニ光勝寺ヲ建立ス云

佛舍利一粒アリ日付上人所傳ト云
 其大サ推子ノ如シ



高九寸五分
 長一尺六寸
 中八寸八分

江川仙太郎刻

